

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第 15 号

長岡京跡左京第118次調査	長谷川 達・土橋 誠	1
—昭和59年度発掘調査略報—		9
13. 波江3・4・5号墳	19. 篠・黒岩作業場跡	
14. 宮津城跡第4次	20. 長岡京跡右京第171次	
15. 奥谷西遺跡	21. 長岡京跡左京第119次	
16. 土師川改修関係遺跡	22. 隼上り2号墳	
17. 味方遺跡	23. 木津地区所在遺跡	
18. 篠・芦原3号窯		
府下遺跡紹介 26. 稻八妻城跡 27. 浅根山城跡		28
長岡京跡調査だより		36
センターの動向		41
受贈図書一覧		43

1985年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 1 長岡京跡左京第118次



(1) 調査地遠景 (東から)



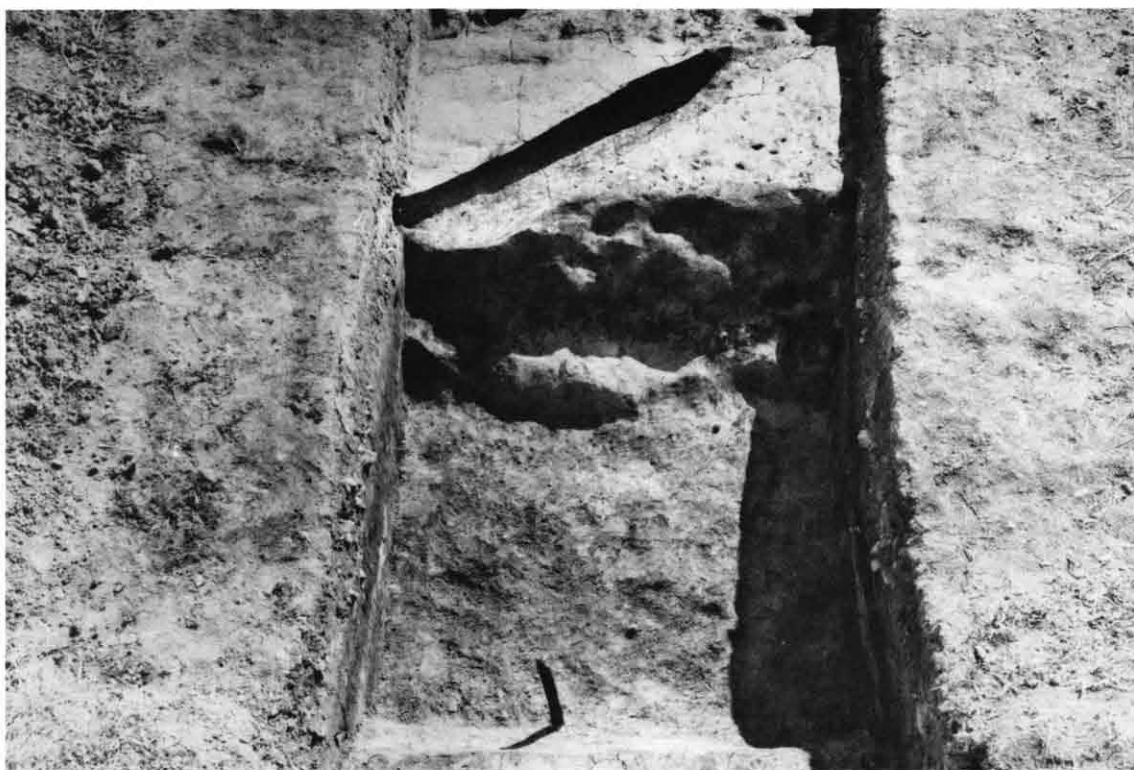
(2) 調査地東部全景 (南から)



(1) 掘立柱建物SB11810 (東から)



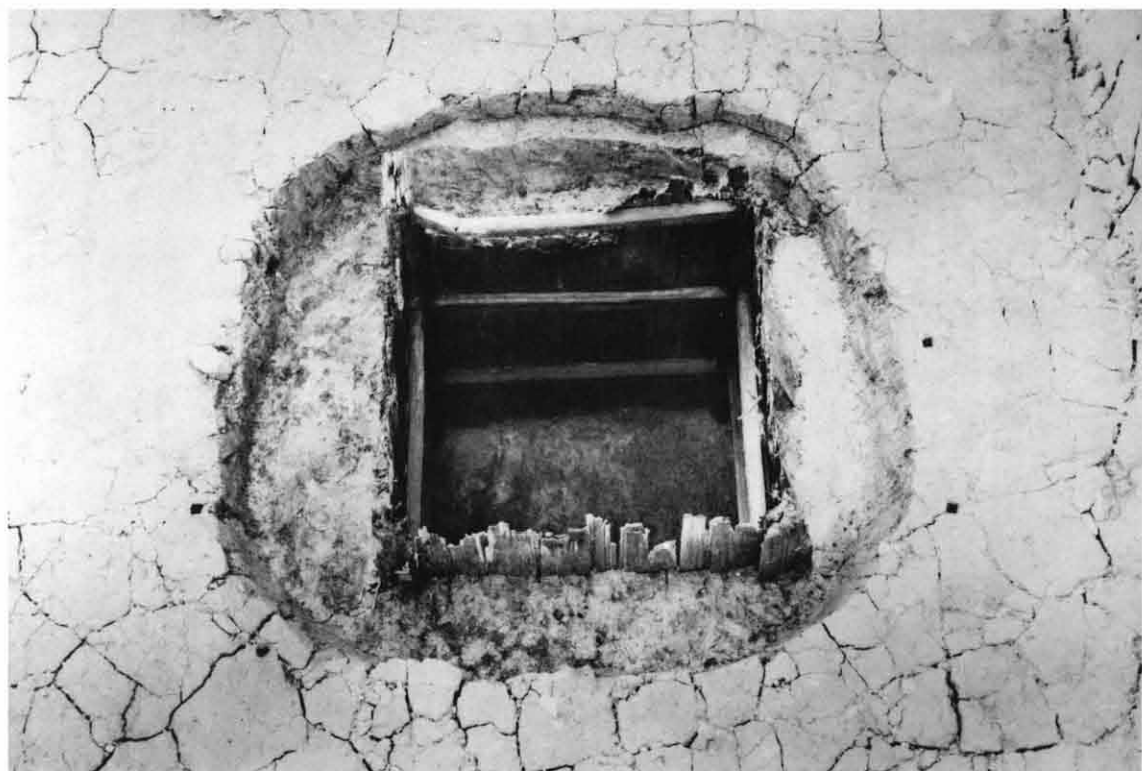
(2) 溝SD11807・SD11805



(1) 南3トレンチ・溝SD11806 (北から)



(2) 溝SD11806遺物出土状況 (東から)



(1) 井戸SE11818 (東から)



(2) 木印

# 長岡京跡左京第118次調査

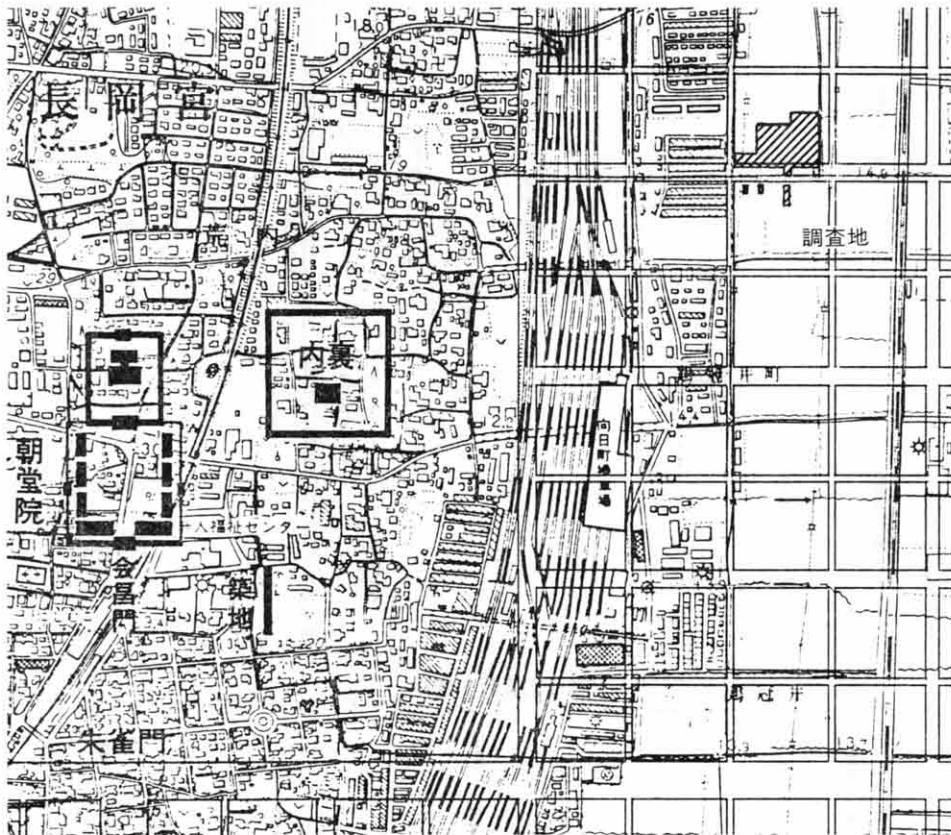
長岡京跡左京一条二坊十町・十一町  
(7ANDKG-3, EJS-3)

長谷川 達・土橋 誠

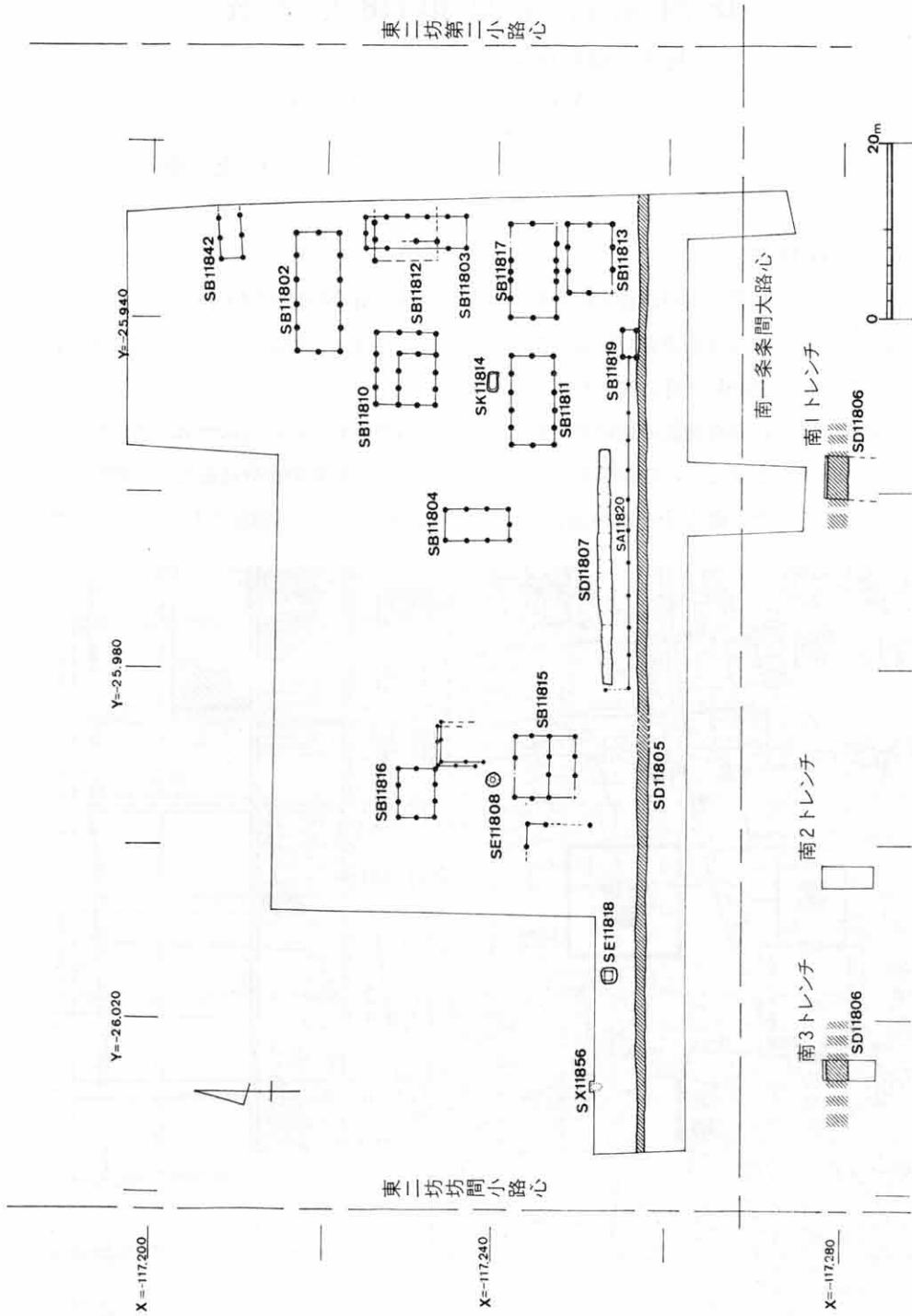
## 1. はじめに

この調査は、京都府向日市森本町小柳23～30、鶏冠井町十相11～14・16における向日市の体育館建設に伴う事前調査である。現地調査は、向日市から委託を受け、昭和59年10月から開始し、昭和60年2月に終了した。

体育館および、関連施設の建設予定地は、長岡京条坊復元では、左京一条二坊十町の一部と十一町に相当するが、発掘調査を実施したのは、体育館建物部分にあたる十町域が主体となった。また十町と十一町の間には、周辺の調査によっても確認されている南一条



第1図 調査地位置図 (1/10,000)



第2図 長岡京期遺構配置図

条間大路(近衛大路)が想定され、敷地の西と東を限って南北に走る市道と農道が、東二坊坊間小路(堀川小路)と東二坊第二小路(油小路)をほぼ踏襲しているものと考えられる場所である。

周辺は、長岡宮の中心建物のある向日丘陵東側の沖積地で、標高は約 14 m を測る。長岡京廃都後は農地として利用されたと考えられる場所で、地形は、ほぼ平坦であるが、北西から東南にかけて、ゆるやかに傾斜する。この付近は、長岡京内でも比較的多くの調査<sup>(注1)</sup>が行われている地域で、長岡京期の遺構をはじめ、縄文時代以降、各時代の遺構・遺物が出土し、今回の調査対象地も、縄文時代後・晩期の石田遺跡の範囲内として把握されていた。また、調査対象地の東側に近接して、狐塚古墳として登録されている円丘が存在する。

## 2. 調査概要

体育館建設予定地は、建物および駐車場、公園等の周辺施設を含めて、約 19,000 m<sup>2</sup> であるが、発掘区は十町域の中で建物部分を中心に約 3,800 m<sup>2</sup> を設定し、後に掘立柱建物群の北側と、南一条条間大路北側溝の延長を確認するために、西側を拡張した。また十一町域では、南一条条間大路南側溝と、狐塚古墳の周濠の有無等を確認するために南 1～3 トレンチを入れた。

発掘区の基本的層序は、耕作土の下に床土(黄褐色粘質土)があり、その下面が、多くの部分で遺構検出面となる。地表からの深さは、場所によって多少の深淺はあるが、30～50 cm と比較的浅い。各時代の遺構ともに、ほぼ同一面で検出したが、それらが掘り込まれる層は、同一面であるにもかかわらず、沖積地という性格上、発掘区内でも場所によって大きく異なる。西部では、黒灰色粘質土であるが、東側になるにつれて、灰色砂層、黄灰色砂層等に変化し、東部では砂礫層となる。このような層位であるために、時期の限られた遺物包含層は、ほとんど存在せず、床土下部から、遺構検出面にかけて、各時代の遺物が、混在するという状況を示す。なお、柱掘形の深さなどの遺構検出状況から類推して、調査地全体が、後世の削平を受けていると考えられる。

**検出遺構** 検出した主要な遺構には、長岡京期のものとして、南一条条間大路、同南・北側溝、掘立柱建物、柱列、井戸、土壇などがある。他の時代のものは、弥生時代の溝や鎌倉時代の溝のほか、杭列、流路、溝、土壇などがあるが、遺物を伴わず、時期を確定し得ないものもある。

SF 11801 は、発掘区南部で検出した東西方向の道路であり、南一条条間大路と考えられる。その北側溝として SD 11805、南側溝として SD 11806 があり、大路を画している。SD 11805 は、一部、後世の流路によって寸断され、不明瞭な部分はあるが、延長、



約 109 m にわたって検出した。幅は 1~1.3 m を測るが、深さは 15~40 cm と浅く、ある程度、削平を受けているものと考えられる。SD 11806 は南 1 および南 3 トレンチで検出した。南 2 トレンチでは、後世に攪乱され、検出できなかった。南 1 トレンチでは幅が上面で 2.4 m、深さ 25 cm を測り、南 3 トレンチでは、幅 2.6 m、深さ 50 cm である。南側溝は、検出した長さが、限られるが、幅・深さともに北側溝を凌駕し、南 3 トレンチでは、埋土中にある細砂礫層の堆積状況から、水の流れた痕跡が顕著に観察できる。これらの各遺構から、南一条条間大路は、側溝心々間<sup>(注2)</sup>で 22.5 m、遺存道路幅は約 21 m である。

SD 11807 は、SD 11805 の北側に平行して掘られた溝で、幅 1.1~1.4 m、深さ 10~30 cm を測り、長さ約 27 m である。東西の建物群の間で、建物の少ない部分についてだけ、掘削されている。これら両溝の間に、柱列、SA 11820 が設置される。これは、北側溝に接して建てられている SB 11819 から西にのびる柱列であるが、柱掘形は小規模で、柱間は 3~3.7 m と、厳密には統一されていない。また、この柱列の西端から、約 3 m 北側で SD 11807 の西端に接する位置にも柱穴があり、柱列と繋がるものである可能性が高い。

掘立柱建物は、14棟以上を検出した。大きく分けると、発掘区東部の10棟、発掘区西部で、井戸 SE 11808 の周辺の 4 棟以上で、すべて掘立柱建物である。

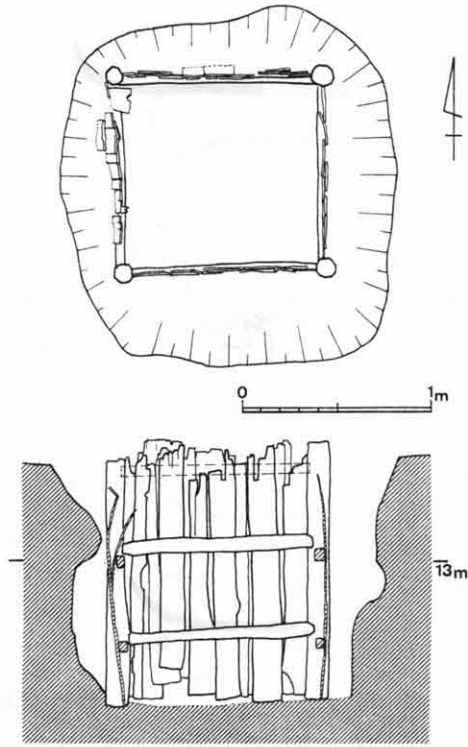
SB 11802 は、東部建物群の北側中央に位置する東西棟の建物である。桁行 5 間 (9 尺等間)、梁行 2 間 (8.5 尺等間) で、柱掘形は遺存状況の良好なものが、一辺 60~70 cm の矩形を示す。その南西に、SB 11810 が配置される。桁行 3 間 (6.5 尺)、梁行 2 間 (7 尺) であるが、北側に 9 尺、東側に 8 尺の廂の出があり、全体として 3 間×4 間の規模となる。SB 11812 は、位置・柱間寸法等から、SB 11810 と対になる形で建てられたものと考えられるが、東側は調査対象地外になるとともに、中世溝により削られた部分も多く、その全容を知ることはできなかった。SB 11812 に重って SB 11803 が建てられている。柱穴の遺存状態は悪いが、桁行 5 間 (8 尺等間)、梁行 2 間 (6 尺等間) の長大な南北棟建物である。この南に、SB 11811 と SB 11817 が、対になる形で東西に配置されている。ともに東西棟で、SB 11811 は、桁行 5 間 (7 尺等間)、梁行 2 間 (8 尺等間) である。SB 11817 は、桁行 5 間で 7 尺等間を基本にしているが、中央部は 8 尺となり、間にさらに 1 柱が入る特異な形状となっている。梁行は 2 間で 9 尺等間である。SB 11813 は、桁行 3 間 (7 尺等間)、梁行 2 間 (8 尺等間) の建物であるが、南西隅の柱穴は、中世の土壇によって削られている。この建物群の南に SB 11819 がある。東西ともに 1 間であるが、東西がほぼ 10 尺、南北が 5 尺で、長方形を呈している。形状・位置等から、小規模な門の可能性はある。

西部の建物群は、SE 11808 を囲むようにして建てられているが、その全体規模を確定できるものは、SB 11815 と SB 11816 である。SB 11815 は、桁行 3 間 (8 尺等間)、梁行 2 間

(7尺等間)で南側に9尺の廂を持つ。母屋部分には、2個の柱穴が重なるが、廂部分の柱穴は単独であり、改築に際し、形状を変化させたものと考えられる。なお、この建物の3か所の柱穴に須恵器壺G・高杯が入れられていた。

SE 11818(第3図)は、調査地の西部で検出した隅柱横棧縦板式の井戸である。井戸枠は、東西・南北ともにほぼ1mで、四隅に面取りを施した柱を立て、柄を持った横棧を渡して、四辺の縦板を支えている。横棧は3段遺存していたが、南北面と東西面では高さを変え、上下差をつけて渡されている。掘形検出面からの深さは1.45mである。SE 11808は、検出面で径1.6m・底径0.6mのほぼ円形を呈し、深さ1.3mを測ったが、井戸枠は遺存していなかった。

埋土下部からミニチュア竈・斎串・柄付刀子・手斧の一種とも考えられるコテ状鉄器・墨書土器などが出土した。

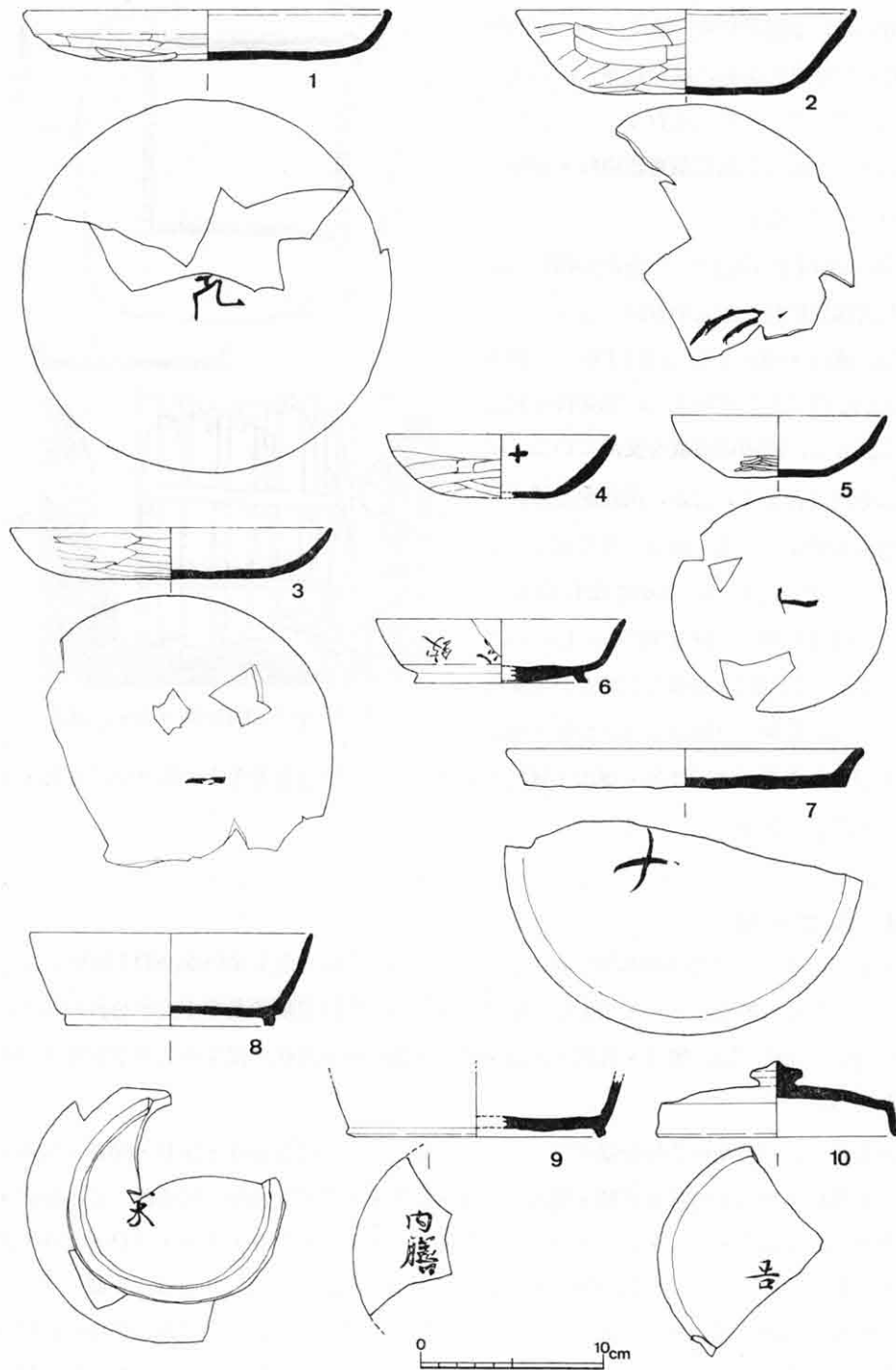


第3図 井戸 SE 11818 平面・立面図

### 3. 出土遺物

遺物が出土したのは、SD 11805 およびその西部の溝周辺が最も多いが、SD 11806 および、井戸からも比較的まとまって出土している。時期は、長岡京期のものが大半を占めるが、そのほかの時代では、縄文・弥生・古墳・平安・鎌倉の各時代に属するものが少量ずつ出土している。

最も多い長岡京期の遺物を羅列すると、<sup>(注3)</sup>土器類では、土師器杯A・杯B・同蓋・皿A・皿B・皿C・椀A・椀C・高杯・甕A・甕B・壺E・羽釜等があり、須恵器では、杯A・杯B・同蓋・皿A・壺A・壺B・壺E・壺G・壺L・壺M・平瓶・鉢A・鉢D・甕A・甕C等がある。ほかに少量の緑釉陶器・黒色土器・製塩土器が出土している。土製品では、ミニチュアの竈と鍋、それに土馬がある。金属製品には、刀子、釘、鉄斧、帯金具、銭貨がある。帯金具は、銅製の丸柄で、内面に黒漆の塗布してあった痕跡が残っている。銭貨には、和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種類がある。瓦類は調査地全体から出土したが、



第4図 墨書土器実測図（1～5土師器，6～10須恵器）

総量は比較的少ない。軒丸瓦は2点出土し、その内1点は平城宮6133型式である。軒平瓦は5点出土したが、平城宮6801型式と6802型式で、全て飛雲文系軒平瓦という特徴的なものに限られている。木製品には、箸、櫛、杓子、刀子の柄、曲物の一部、斎串、人形などのほか、柱根、杭や種々の加工木がある。ほかに、漆器碗、籠類断片や自然遺物として、桃・梅・胡桃の種子、瓢箪、貝、獣骨、などが出土している。須恵器の中には、杯Bの身・蓋を用いた転用硯が多いが、陶硯そのものは出土していない。墨書土器も、文字、記号を限らず、全体が残るものは少ないが、「楊」、「内膳」、「厨」、「丸」、「丸」、「坂」、「大」、「吉」、「×」、「一」などがあり、その一部を第4図に示した。

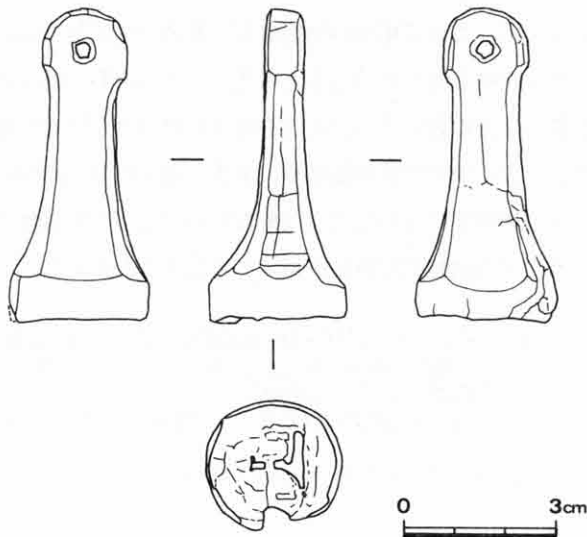
長岡京期以外の遺物には、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器や瓦器、青磁・白磁の磁器類、宋銭、石鏃などが出土している。 (長谷川 達)

次に、極めて出土例の少ない木印について記述する。

この木印は、南一条条間大路南側溝を検出した南第3トレンチから出土した。この南側溝は、先述のように遺存状態がよく、中でも第6層(砂礫層)には多量の土師器類(長岡京時代)が含まれていた。木印は、土師器・高杯脚部の中から発見された。高杯脚部を逆にして、その中空部に印面を上にした状態で埋っていた。

木印の形状は、高さ約6.1cmで、鈕を持つ。その形式は「有孔弧鈕」に属している。この形式は珍しく、銅印ではほとんどなく、滋賀県高島郡高島町鴨遺跡出土の銅印が知られるくらいである。木印の例は、全体的に少ないため、直ちに比較することはできないが、有孔弧鈕の例としては木印の中でははじめてである。

印面は円形で、径2.8cmある。現存の印章(传世品も出土品も含む)では円形のものではなく、古文書の印影でも、「造東寺印」・「経所」・「宮衣」の三例程度知られるにすぎない。<sup>(注4)</sup>日本の印章は公印を中心につくられたため、銅製の正方形印が多い。その他の印でも正方形印の変形した八角形印があるにすぎない。「造東寺印」は造東大寺司政所、「経所」は写経所で用いられた印章で公印的性格を持つが、令



第5図 木印実測図

の規定にないものである。今一つの「宮衣」印は知恩院蔵の宝亀3年4月26日石川宮衣解にしかおされておらず、数ある「石川宮衣解」の中でも特異である。古文書の内容自体は他のものと同じく、写経生の手実で、特別変化のあるものではない。「宮衣」は径が約3.8cmあり、今回出土した木印よりも約1cm程度大きい。

木印の材質は、杉か檜で、鈕の部分には削った痕跡が認められる。なお、鈕の一部と印面全体には墨痕が認められる。これが何を意味するか不明だが、黒印をおした痕跡とすれば、極めて貴重な発見例であるといわねばならない。(土橋 誠)

#### 4. おわりに

今回の調査で中心となった発掘区は、長岡京左京一条二坊十町の南半部にあたり、京域でも、長岡宮に極めて近接した場所に位置する。調査面積は、十町部分で、約4,700m<sup>2</sup>あり、町全体のおよそ $\frac{1}{2}$ にあたり、この町内の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。

長岡京跡においては、比較的広い面積の調査が行えたことから、整然と配置された建物群の把握が可能となった。特に東部建物群では、SB 11802を中心に、本来、左右対称に近い形で建物が配置されていたと考えられ、SB 11802の西側梁から、SB 11810・11を経て、SB 11819に至る南北の柱列がほぼ揃うこと、あるいは、東・西の建物群の関係からも、綿密な計画のもとに建設されていることが窺える。しかし、中心建物と考えられるSB 11802にしても、その形状、柱掘形の大きさなどから、決して大規模なものとはいえ、整然と配置はされているものの、建物個々についてみると、全体的に、やや規模の小さいものである。これら東西の建物群が、井戸の位置等から、一連のものであり、少なくとも南半町を占地したものであると考えられるが、SD 11807の形状や、建物群間を南北に走る細い溝の存在など、さらに検討を加えなければならない要素を残している。建物群の性格については、周辺の調査結果や、墨書土器・転用硯の量、あるいは平安京との対比などから、宮域内の諸司に直結した官衙的なものであった可能性が高いとも考えられるが、それを特に肯定する積極的な資料を得ることはできなかった。(長谷川 達)

注1 周辺では左京第10・14・26次調査があり、89次調査で南一条条間大路南側溝が確認された。

注2 国土座標 SD 11805 (西端) X=-117,257.3 Y=-26,034.0, SD 11806 (南3) X=-117,279.8, Y=-26,025.0

注3 土師器・須恵器の器種名は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 XI』1981による。

注4 木内武男『印章』(柏書房)1983

## 昭和59年度発掘調査略報

## 13. 波江 3・4・5 号墳

所在地 福知山市字牧小字狭間276・280  
 調査期間 昭和59年10月29日～昭和60年3月18日  
 調査面積 約 400 m<sup>2</sup>

はじめに 波江古墳は、国鉄福知山駅の北約5 km の由良川と牧川の合流点にほど近い牧川右岸、国道9号線と牧川が交差する地点の東にある低位丘陵上に存在する。

この牧川流域には、古くは縄文時代早期より各時代にわたって数多くの遺跡が存在している。今回発掘調査を実施した波江古墳が築造された古墳時代に限ってみれば、牧川周辺では古墳時代後期の群集墳が卓越している。これらの古墳群は牧川上流部の夜久野盆地周辺と、下流部の福知山市牧地区周辺の2か所に集中している。この牧集落の背後の丘陵には、牧正一古墳・弁財1号墳・道勘山1号墳・岩田1号墳等の代表的な古墳とその支群が認められる。波江古墳は、これら牧古墳群の南東方向牧川を挟んだ対岸の丘陵上に相対して存在している。

今回発掘調査を実施した波江3～5号墳は、日本国有鉄道宮福線鉄道建設に伴う遺跡分布調査を実施した際に発見された古墳である。今回の発掘調査は宮福線鉄道建設工事に伴う発掘調査で、同線関係の調査としては同じ牧地区の水田地帯で多量の木製遺物・土器等が出土した石本遺跡(6～7世紀の集落跡)を波江古墳に先立って調査している。

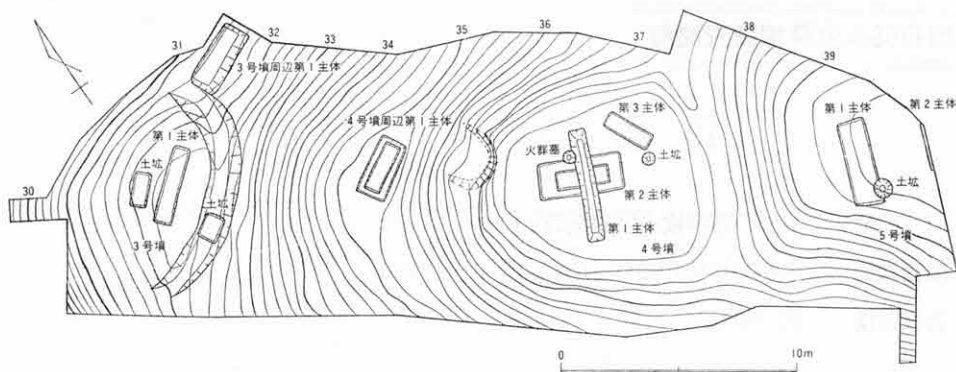
**調査概要** 波江3～5号墳の存在する丘陵は南東から北西方向にのびる狭長な丘陵で、地形測量の結果、調査地内の尾根上に4か所の平坦地が認められた。うち3か所が古墳と判明し、尾根先端部から3号墳・4号墳・5号墳とした。

(1) **3号墳** 丘陵主軸に直交する弧状の溝を墳丘南東側に認める。墳丘は地形



第1図 調査地位位置図 (1/50,000)

1. 波江古墳群 2. 牧正一古墳 3. 弁財古墳群  
 4. 樋ノ口古墳群 5. 道勘山古墳群 6. 岩田古墳群 7. 平石古墳群



第2図 調査終了後測量図

に制約され、不定形な楕円形を呈する。墳丘上には埋葬主体部1か所(3.25 m×0.8 m)のほか6世紀後半の須恵器を伴う土坑(1.45 m×0.75 m)が存在した。墳丘外部北東にもう1か所埋葬主体部(2.5 m×1 m)を検出した。主体部中には鉄器1のほか須恵器(杯身・有蓋高杯蓋)等が出土した。

(2) 4号墳 丘陵主軸に直交するやや弧状の溝を墳丘南東側に持つ。墳丘は10 m前後の規模で方形を呈する。墳丘上では3か所の埋葬主体部を検出した。第1主体部(4.9 m×0.9 m)・第2主体部(3.6 m×1.6 m)・第3主体部(2.2 m×0.75 m)であり、第2主体部では木棺部(2.15 m×0.75 m)が確認できた他、鉄鏃1点が出土した。墳丘北西斜面には小規模なテラスが造られ、そこから埋葬主体部(3 m×1.5 m)1か所を検出した。木棺の規模は2.2 m×0.75 mであった。この主体部付近より金環が1点出土している。

(3) 5号墳 墳丘の西半分が調査地内に含まれる。墳丘は一辺約12 m前後の規模をもつ方墳とみられる。墳丘の北西部には丘陵主軸に直交する溝をもつ。溝の一部は4号墳の墳丘を削っており、4号墳に伴う溝がある程度埋った段階でその上部に5号墳の溝が、新たに造られたことが判明した。墳丘部で埋葬主体部2か所を検出した。第1主体部(3.7 m×1.2 m)・第2主体部(2.1×? m)であり、第2主体部は調査予定地外にその大部分をもつため検出したのにとどめた。

(4) その他 4号墳墳頂部に鎌倉～室町時代とみられる墓(東播系の甕・片口鉢を蔵骨器として使用)1基を検出した他、調査地内の3か所で時期不明の土坑を検出した。

まとめ 調査の結果、波江3～5号墳は6世紀後半から7世紀初頭にかけての、木棺直葬を埋葬形態とする古墳群であった。以前は調査地の北西に隣接する丘陵上に2基の古墳が知られていたのみであった。同様な丘陵が南西方向にも数多く存在していることから波江3～5号墳と同様な古墳群が、これらの丘陵上にも多数存在することが予想されることから、新たな分布調査を実施することが必要であろう。(竹原 一彦)

## 14. 宮津城跡 第 4 次

所在地 京都府宮津市字柳縄手  
調査期間 昭和60年2月6日～3月30日  
調査面積 約 150 m<sup>2</sup>

はじめに 調査地は、宮津城跡大手橋の北隣に位置する。今回、明治19年築造の国道176号線大手橋改良工事に伴う発掘調査であり、宮津城跡の外堀内側石垣の検出が予想された。宮津城は天正8(1579)年に丹後入りした細川氏により築かれ、その後京極氏の代に改築されているが、その後ほとんど宮津城の規模に変化はなかったようである。

調査経過 大手川(宮津城西外堀)両岸の調査地のうち、宮津城域外にあたる左岸部では、宮津城を描いた絵図面にも石垣は描かれておらず、調査においても石垣等の遺構は検出されず、痕跡を認めることはできなかった。

大手川右岸部の調査では、旧大手橋橋台の撤去後、重機と人力による掘削を実施し、調査地内より新旧2時期の石垣を検出した。古い段階の石垣は京極氏築造の宮津城外堀石垣とみられ、大手橋から北東方向へ延びていた石垣の一部と推定される。石垣の石材は花崗岩の自然石を使用し、基底石より3段目まで遺存していた。基底石の下部には厚さ約7cmの胴木が認められた。新しい時期の石垣は、古い石垣の前面にく字形に張り出す増築が認められた。この石垣は基底石より2段目まで遺存しており、石材は花崗岩の割石と自然石が使用されていた。胴木は認められず、基底石の下には栗石及び大型の自然石が約1mの厚さで敷かれていた。この石垣の増築時期に関しては不明な点が多い。出土遺物は近世・近代の陶磁器・瓦・硯・五輪塔・銭貨(熙寧元宝)等が出土している。

まとめ 近年、宮津城跡の発掘調査が実施されてきており、各調査地から数多くの遺構の検出が報告されている。明治初期の廃城後、宮津城はその大部分を破壊され、地表にその痕跡をほとんど残していないが、今回の調査の結果からも、地表下にはまだまだ数多くの遺構が遺存しているものとみられる。

(竹原 一彦)



調査地位置図 (1/25,000)



## 15. 奥谷西遺跡

**所在地** 福知山市大字大内小字奥谷  
**調査期間** 昭和59年5月7日～昭和60年3月15日  
**調査面積** 約 5,000 m<sup>2</sup>

はじめに 本調査は58年度に一部調査したものを継続して実施した(情報12号)。遺跡は福知山市南東部の標高約77m, 周辺田地との比高差約45mの台地上に位置する。西側は竹田川・土師川を中心に平野が広がり, 東側は遺跡の所在する丘陵が張り出す。調査の結果, 竪穴式住居跡・溝・土壇・柱穴と数多くの遺構・遺物を検出した。

**調査概要** 主要検出遺構は以下のとおりである。

弥生時代中期 竪穴式住居跡(SH 393・402?・409?), 溝(SD 03・155)

弥生時代後期 竪穴式住居跡(SH 01・230?・231?・235)

古墳時代後期 竪穴式住居跡(SH 144・145・171?・252?・401?・404), 土壇(SK 192)

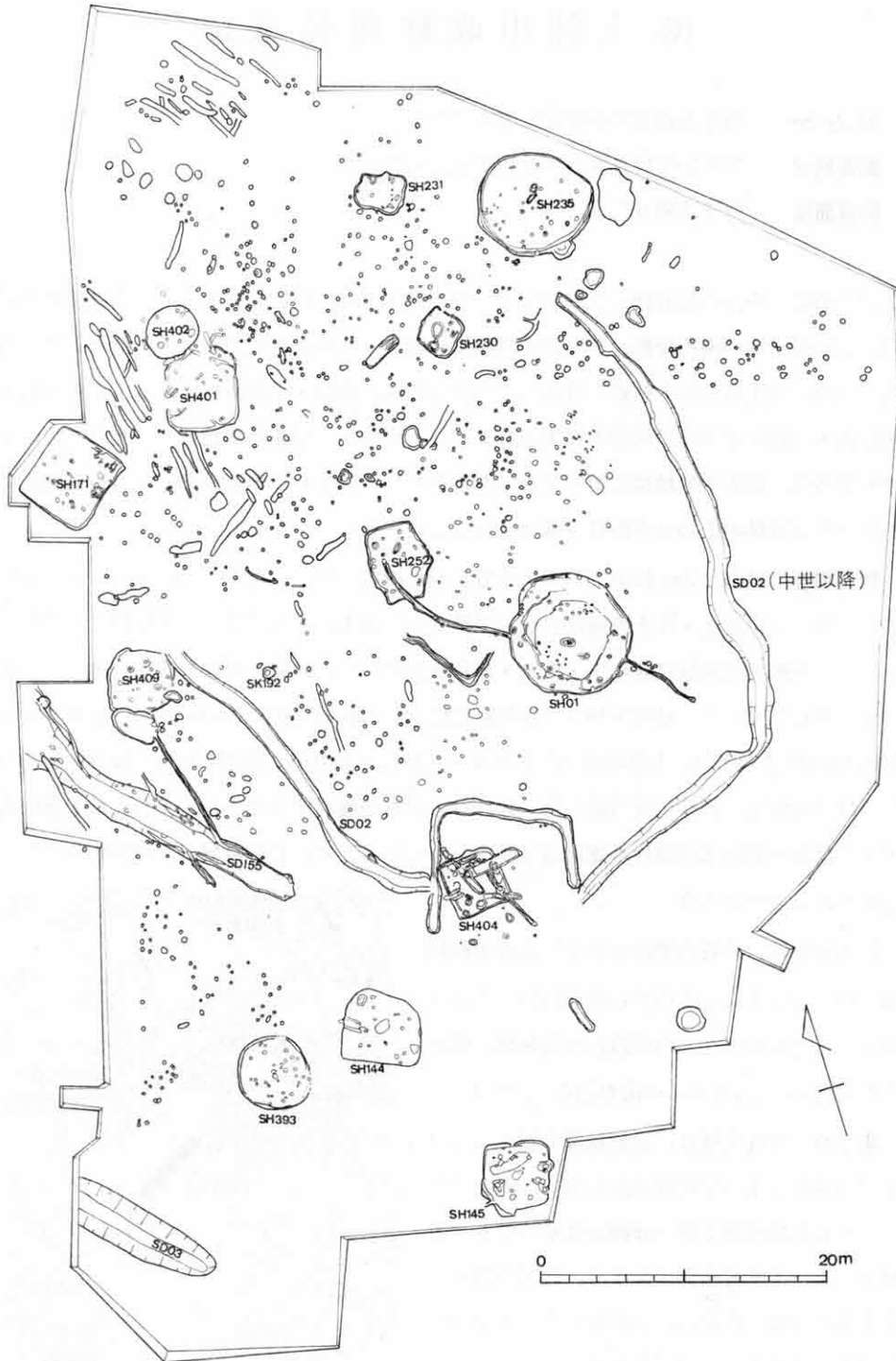
弥生時代中期には, 台地の縁辺部に溝(SD 03)と住居間にある溝(SD 155)と二本の条溝が掘られ, 同時期に3基?の竪穴式住居が営まれた。溝は更に東側にのび, 集落も調査地外東側平坦地に広がるものと考えられる。後期には大型の円形住居跡が出現する。隣接するケシケ谷遺跡で同規模の円形住居跡(弥生時代中期後半)を検出しており興味深い。古墳時代に入ると集落は絶えるが, 後期になると再び営まれる。住居跡は竈を有するもの(SH 144・145・401・404)と有さないもの(SH 171・252)に分かれる。中でもSH 144の竈は径160cmの特異なものである。尚, SH 401・404で周溝を検出した。

まとめ 本遺跡は弥生時代中期には広義の「高地性集落」と考えられる台地上にあるが, 古墳時代後期も集落として利用されている。従って, この地が集落に都合がよいのか, 自然条件に規制されていたのか, 高地の集落だけでは捉えきれない。集落自体も同時期に併存したのは少数と思われる, 中心的な集落とは考えにくい。周辺の大内城跡・ケシケ谷遺跡・宮遺跡・城ノ尾遺跡との関連が目される。

(藤原 敏晃)



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 遺構平面図

## 16. 土師川改修関係遺跡

**所在地** 福知山市長田小字前ヶ嶋・下出合  
**調査期間** 昭和59年11月8日～昭和60年3月8日  
**調査面積** 約 1,850 m<sup>2</sup>

**はじめに** 今回の調査は、土師川水系河川改修工事に伴い実施したものである。調査地は、長田野台地の南西縁部、土師川と竹田川とによって形成された沖積地に位置している。周辺では、先土器時代の削器をはじめ、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器や須恵器・土錘など各種の遺物が採集されており、以前から遺物散布地として知られていた地域である。調査対象地は広範囲であったため、各所にトレンチを設けて、遺構・遺物の有無および遺跡の広がりや性格を確認することに主眼をおいた。

**調査概要** 調査は3m幅のトレンチを31か所に設定して行った。その総延長は600mに及ぶ。掘削は耕作土・床土を重機によって排除したのち、人力によって各層位ごとに掘り下げた。全般的な層位は耕作土・床土・砂質土層の順で、砂質土層の下は砂と礫との互層が厚く堆積していた。砂質土層は、調査地北側および中央付近で50cm程度、南側で80～100cmの厚さがあり、土色の違いにより4～8層に分かれる。調査の結果、砂質土層を掘り下げる過程で、耕作に伴う畝の跡と思われる溝群を検出することができた。最下層の溝内からは近世陶磁器の細片や寛永通宝が出土しているため、この溝群は、近世以降に掘り込まれたものであろう。

出土遺物は、砂質土層から出土した近世陶磁器の細片がほとんどを占め、砂礫層からの出土はまったくなかった。中世以前の遺物は、磨滅したものが多く、外からの流れ込みと思われる。

**まとめ** 砂質土層は、近世以降の度重なる土師川の氾濫によって形成されたものと考えられる。砂質土層に続く厚い砂礫の堆積のなかに遺構面の存在する可能性は少なく、既述の遺物を出土した遺跡の中心は、調査地北方のやや高くなった段丘上にあるのであろう。

(三好 博喜)



調査地位置図 (1/50,000)

## 17. 味 方 遺 跡

**所在地** 綾部市味方町中ノ坪  
**調査期間** 昭和59年12月13日～昭和60年3月30日  
**調査面積** 約 1,200 m<sup>2</sup>

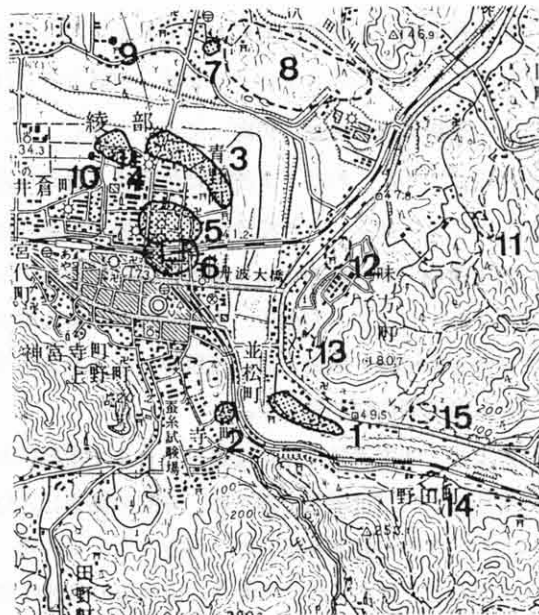
はじめに 丹波高原の山間部を縫うように流れる由良川は、綾部盆地に流入する直前で北に大きく流路を変える。味方遺跡は、この河川屈曲部の右岸に立地する。当地域は、北西側の山脚部から由良川に向かって緩やかな傾斜面を持ち、その河岸に沿って低平な自然堤防状の微高地が帯状に細長く延びている。

味方遺跡が周知されるようになったのは、昭和45～46年頃からで、今回の調査地に近接する笠原神社付近の畑地周辺や、その上流約 400 m 付近の 2 地点を中心に、縄文・弥生時代に属する石鏃やチャート片、サヌカイト剥片、弥生土器、須恵器、土師器片等が採集されている。

今回の調査は、国道 173 号線の新丹波大橋橋梁新設工事に伴い、その事前発掘調査として実施したものである。

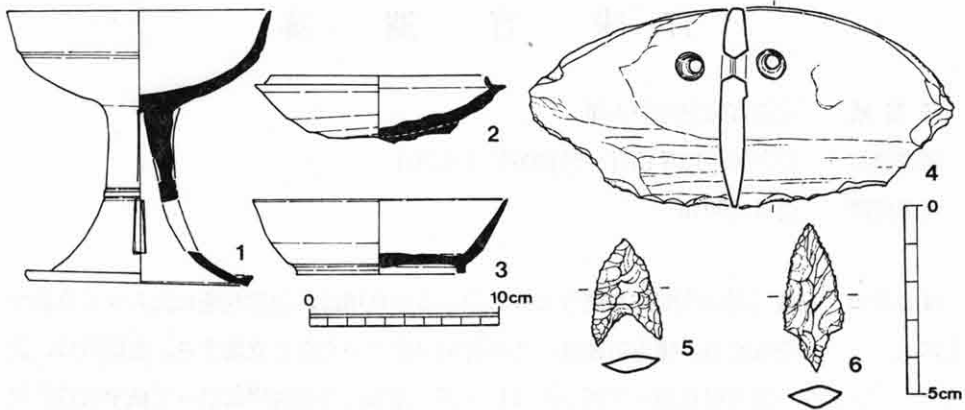
**調査概要** 調査箇所は、山麓を走る国道24号線沿いから由良川河岸に至る南北 260 m の範囲であり、調査にあたっては、道路センター杭を基準線として用いて幅 4 m、長さ10～30 m 前後のトレンチを合計 10 本設け、全域の試掘調査から開始した。試掘トレンチは北から南へ 1～10 までの通し番号で呼称する。

試掘調査の結果、1～6 番までのトレンチでは、顕著な遺構は検出されなかったものの、由良川河岸に近い地点に設けた 7～9 番トレンチからは、各時期にわたる各種の遺構・遺物を検出した。当地点については、調査範囲を拡張し、遺構の面的な把



第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1. 味方遺跡 2. 寺町遺跡 3. 青野遺跡 4. 青野西遺跡
5. 青野南遺跡 6. 綾中遺跡(廃寺) 7. 久田山遺跡
8. 久田山古墳群(71基) 9. 里古墳 10. 青野大塚古墳
11. ごまさの池古墳群(2基) 12. 齊神社古墳群(7基)
13. 平古墳群(2基) 14. 野田古墳群(2基) 15. 古墳群(3基)



第2図 出土遺物

1～3. 須恵器 4. 石包丁 5・6. 石鏃  
 (1・2, 8トレンチ土器溜り 3, 9トレンチ土塚 4・5, 7・8トレンチ包含層 6, 8トレンチ)

握に努めた。

検出遺構としては、東西方向に延びる弥生時代の溝をはじめ、同じく弥生時代中期に属する円形堅穴式住居跡2基、方形周溝墓状遺構、古墳時代後期の、いわゆる青野型方形堅穴式住居跡2基、土器溜り、奈良時代及びそれ以降に係わる掘立柱建物、柵列、大小の土塚、多数の柱穴状ピットが主要なものである。各遺構は、現耕作土面直下の比較的浅い箇所で見出されたが、7と8トレンチを結ぶ中間地点では、凹地状の地形の下がりが見られた。なお、遺構面は、由良川に向かって再び上昇し、河に近い9・10トレンチでは砂質の強い土層に変化する。これは、下流域に位置する青野遺跡などと同様な立地状況を示している。

なお、9・10トレンチを除いて、全般に山麓の伏流水の影響が湧水が激しい。

**出土遺物** 今回調査の出土遺物には、縄文時代の石鏃・石錘・石斧等の石器類をはじめ、弥生土器・石包丁・石剣片、古墳時代から奈良時代の各種須恵器・土師器、平安～鎌倉以降の輸入陶磁器、黒色土器、瓦器等が見られる。また、河岸立地遺跡の性格を示すように特に土錘の個体数が目立つ。

**まとめ** 味方遺跡については、これまで広範囲な遺物散布地として知られていたが、その実態については不明であった。今回の調査は、路線内という限定された範囲の調査であったが、多くの知見を得ることが出来た。その第一は、当遺跡の横の広がりがある程度把握出来たことである。すなわち、由良川の自然堤防状微地形を中心に、南北100m前後の幅を持つことが判明した。これより上流の由良川流域では、集落立地の条件を満たすまとまった空間を確保するのが難しく、この意味で山間部と盆地内の平野部とを結ぶ接点に所在する遺跡として、当遺跡は重要な位置を占めるものと推測される。(辻本 和美)

参考文献 『綾部市史』上巻 昭和51年

## 18. 篠・芦原 3 号 窯

**所在地** 亀岡市篠町大字篠小字芦原  
**調査期間** 昭和59年11月5日～昭和60年1月19日  
**調査面積** 約 50 m<sup>2</sup>

はじめに 芦原3号窯は、昭和55年度の芦原1号窯発掘調査時に、溜池の淵においてその所在が確認された。今回の調査は、削平されてはいるが窯の構造・規模等詳しい資料を得ることを目的として実施した。

**調査概要** 3号窯は、池の断面観察の結果、1号窯灰原に先行して構築されたものである。掘削は、まず1号窯灰原を除去し、3号窯の検出に努めた。この過程で1号窯灰原の下部から3号窯に伴う側溝を検出した。

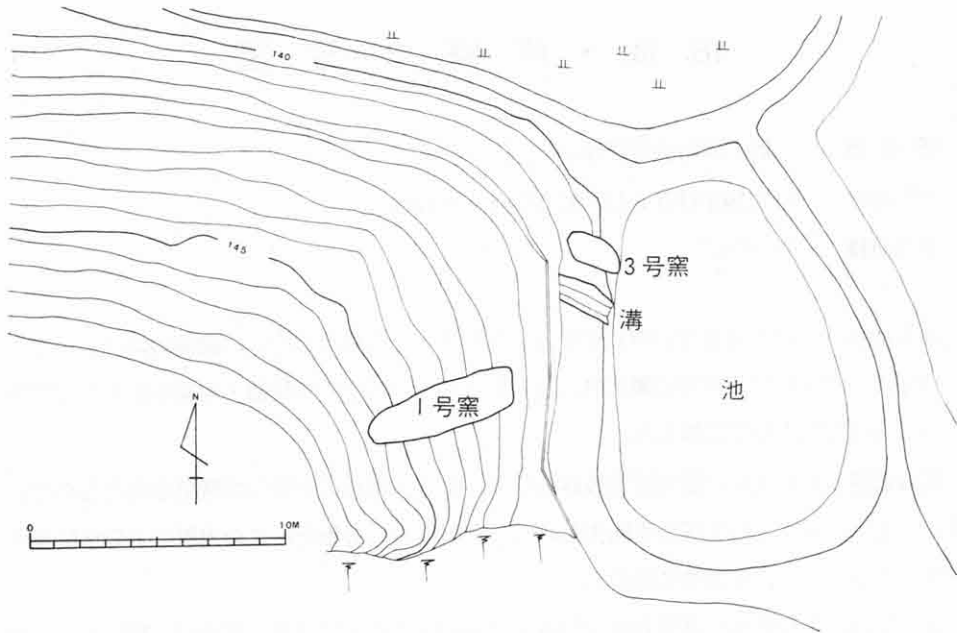
3号窯は、<sup>(注)</sup>1号窯の北東約6mに位置する半地下式登窯である。窯体は、残存長さ2.5m・幅1.1mである。天井部が崩落し、床面及び側壁も一部を残すのみである。これは、窯体の焼成部から煙道部に相当するものと推定される。スサ入り粘土で造られた天井部は崩落して床の全面を覆っている。側壁・床面は、補修作業の痕跡が認められず、窯の操業は短期間であったかもしれない。窯体の主軸の方位はN-72°-Wで、1号窯とは大きく振れている。床面傾斜角は38°で1号窯と同値である。窯体内には腐植質を含む灰褐色泥土が堆積し、須恵器の杯身・杯蓋・皿等が遺存していた。3号窯の灰原は、溜池の構築の際に欠失した。

3号窯の側溝は、3号窯の南側に位置し、最大幅1m・深さ0.4m、断面U字形を呈している。窯体と主軸が平行しており、その心々間は1.8mである。溝内には1号窯灰原(炭・焼土)が堆積しており、須恵器の杯身・杯蓋の完形品が出土した。

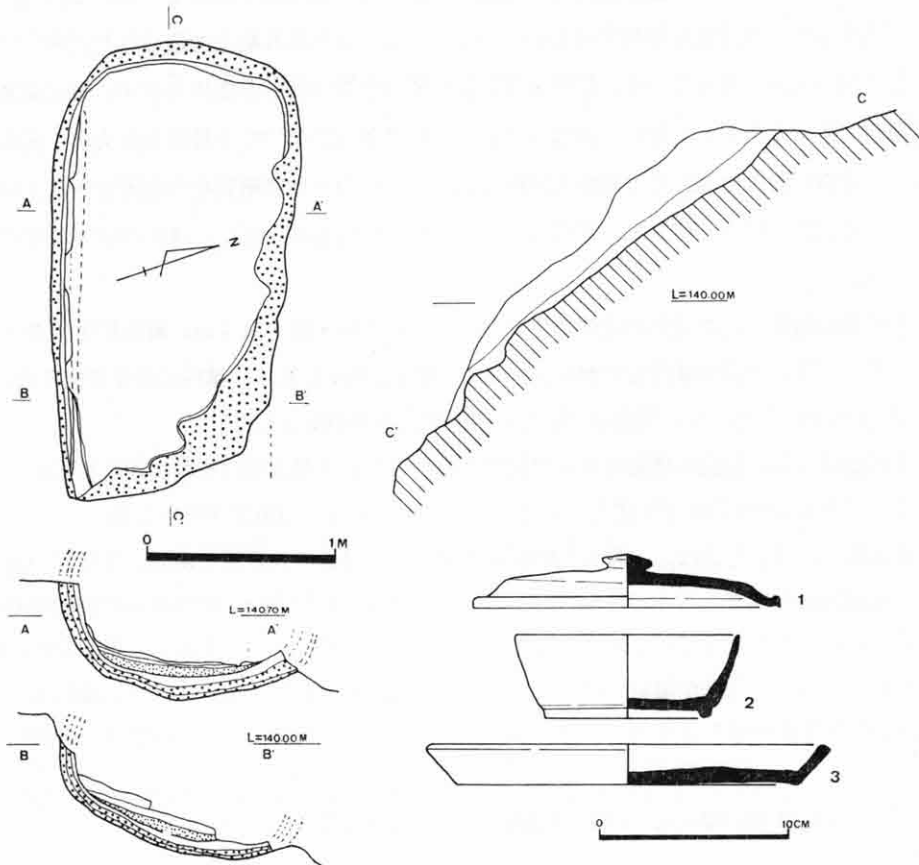
1号窯灰原は、溜池の構築によって欠損しているが、1号窯焚口を要に扇状に広がっている。厚さ0.3～0.5mで堆積しており、整理箱で10箱分の須恵器が出土した。

**まとめ** 芦原3号窯は、1号窯と同様の規模をもつ半地下式登窯である。3号窯の側溝は、篠窯跡群の調査で初めて検出されたものである。この側溝は、丘陵斜面に構築された3号窯を雨水から守るために排水溝として設置されたとみられる。しかし、排水溝の設置にもかかわらず3号窯が短命に終り、すぐ1号窯が構築されたことは、諸々の要因があるものの窯業生産の難しさを物語っている。  
(竹井 治雄)

(注) 芦原1号窯方位 N-110°-W 半地下式登窯長さ 6.6m、幅 1.5m 床面傾斜角 38° 『埋蔵文化財発掘調査概報』1981 第2分冊 京都府教育委員会



第1図 調査地平面図



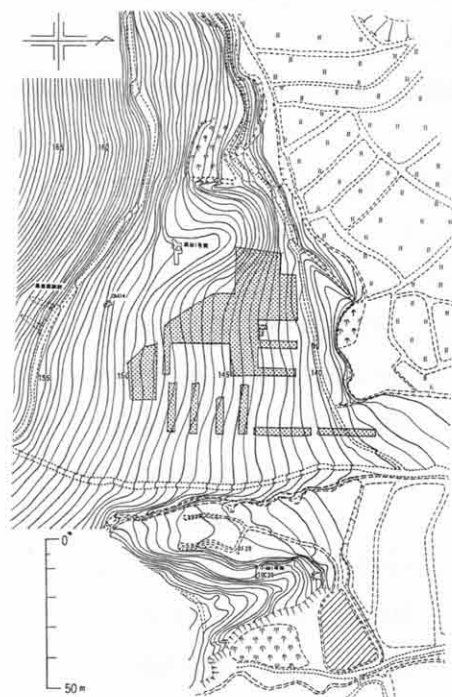
第2図 3号窯窯体実測図及び遺物実測図

## 19. 篠・黒岩作業場跡

所在地 亀岡市篠町大字篠小字黒岩  
 調査期間 昭和59年9月3日～昭和60年3月29日  
 調査面積 1,400 m<sup>2</sup>

はじめに 篠・黒岩作業場跡は9号バイパス関連遺跡である黒岩1号窯・黒岩窯跡群・小柳1・4号窯の間、標高140～150mを測る緩斜面に立地する。黒岩C地区の調査は昭和52年度、京都府教育委員会の試掘調査の結果、CM14グリッドで石垣状の石列とその上部に土壇状の平坦面が、CM29グリッドで直径1m、厚さ2～3cmの炭を埋土とする円形土壇が検出され、同地区周辺に窯業生産に関連した作業場跡が想定されていた。

調査概要 調査は丘陵に平行あるいは直交する形で長さ18m、幅3mのトレンチを14か所設定し、遺構・遺物の検出につとめた。その結果、遺構は調査地の西半、黒岩1号窯に隣接して土壇・ピットのほか、窯状遺構などが検出された。窯状遺構は黒岩1号窯が立地する舌状裾部に立地する長さ約400m、幅約110cm、深さ約30cmを測る楕円形土壇である。SX04は底部より厚さ20～30cmにわたって炭層が堆積し、炭層直上には地山土に近



篠・黒岩作業場跡位置図

似した淡黄褐色土が堆積する。底部及び側壁には赤色焼土が散在し、南側壁の一部には粘土を貼り付け窯壁状に焼きしめられた部分が一部認められる。土壇は、昭和52年度に検出されたCM29区円形土壇(SK01)のほか、CT25区でも直径80～110mの円形土壇があり、SK01と同様、炭を埋土とする。ピットは、各地区に散在するが建物としてまとまるものは検出されなかった。出土遺物は、須恵器・緑釉陶器・石鏃など、整理箱約20箱を数えるが、その大半が表土中から出土し、遺構に帰属する資料は少なかった。出土遺物は黒岩1号窯併行期のものが大半であり、黒岩1号窯に関連した作業場として位置づけられると考えられる。(石井 清司)



## 20. 長岡京跡右京第171次 (7ANITT-10)

**所在地** 長岡京市今里4丁目  
**調査期間** 昭和59年7月9日～昭和59年10月13日  
**調査面積** 約 500 m<sup>2</sup>

**はじめに** この調査は、長岡京市今里地区における都市計画街路(外環状線)の改良工事に伴うものである。調査地は、小畑川西岸の氾濫原とその西方の洪積台地の間を西から東へ傾斜する傾斜変換線付近に位置する。これまでの調査によって、弥生～古墳時代の集落跡(今里遺跡)、5世紀前半の前方後円墳(今里車塚古墳)、長岡京条坊遺構などが検出されている。

今回の調査地が、今里遺跡の南端に位置し、今里車塚古墳の北隣りで、長岡京西二坊大路にあたるため、それらに関連する遺構の検出を目的として発掘調査を実施した。

**調査概要** 調査対象地は、民家が建っていたので盛土や攪乱があるが、基本的な層序は北部地区とほぼ同じである。土層は、耕作土、床土の下が、平安中期の遺物が多い灰褐色土層、長岡京期の遺物を含む褐色土・暗褐色土層、その下に黒褐色土、砂礫層および黄褐色土層となる。調査地の北と南では若干の差がある。

検出した遺構は、長岡京西二坊大路東側溝、長岡京以前の溝3条、古墳時代の溝状遺構(周濠)、弥生時代の円形住居跡などである。

西二坊大路東側溝(SD 17104)は、幅約2m、深さ20cm前後で、長さ17mにわたって検出した素掘り溝である。溝の北端の中心座標は、 $Y = -27,894.85$  で、これまでの調査成果とほぼ一致する。溝からの出土遺物は少ない。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

溝状遺構(SD 17102)は、幅6～7m、溝の下層に厚さ20cm前後の暗青灰色粘質土があり、その上に暗褐色土が堆積している。長岡京期に溝全体が埋め立てられたことがわかった。従来の調査成果と図面上で合成すると、全長約40mの古墳と推定される。推定くびれ部は、近代溝・攪乱等により検出できなかったが墳丘裾でわずかに湾曲す

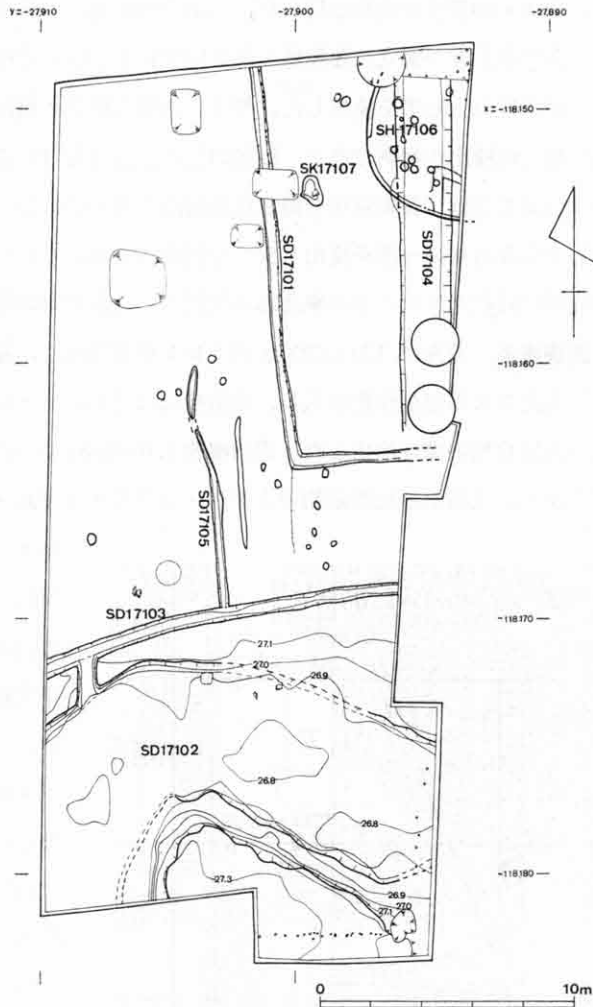
ることがわかった。周濠・墳丘裾に径10cm前後の石が存在するが、量が少なく、葺いた様子もみられない。周濠下層から出土する遺物は、6世紀中葉頃と思われるものが多い。これらから、この古墳(仮称今里庄ノ淵古墳)は、葺石を持たない帆立貝式の前方向後円墳で、6世紀中葉に築造されたものと考えられる。

長岡京以前の溝のうち、中央部で直角に曲がる南北溝(SD17101)は幅50cm前後で深さ約10cmあり、20~30cmの間隔で杭跡がみられる。東西方向の溝(SD17103)は、幅60cm前後で深さ20~30cmあり、溝底に凹地がみられる。この溝に直交する南北溝(SD17105)は、北へ緩やかに曲がり、やがて消滅する。

西二坊大路東側溝の下層で検出した住居跡(SH17106)は、深さ15cm前後あり、復元径は7m前後と推定される。

少量の弥生式土器が出土している。土塚(SK17107)からも弥生式土器と人頭大の石が出土した。

まとめ 今回の調査で、長岡京西二坊大路東側溝・古墳の周濠・弥生時代の住居跡を検出するなど、大きな成果があった。(石尾 政信)



第2図 調査地平面図

## 21. 長岡京跡左京第119次 (7ANFNT-4)

所在地 向日市上植野町西大田  
 調査期間 昭和59年10月11日～11月30日  
 調査面積 約 290 m<sup>2</sup>

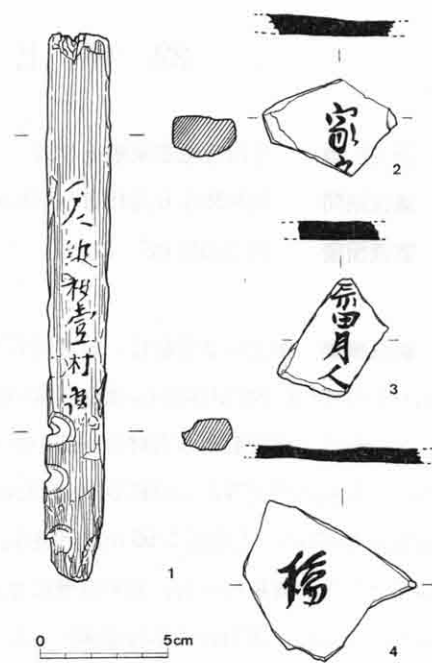
はじめに 今回調査を行った京都府立向陽高校は、長岡京跡左京三条二坊四町・五町・四條二坊一町・八町及び三条大路・東二坊第一小路等の推定地に位置する。高校開校に伴い昭和49・50年度に調査が行われ、三条大路南北両側溝や三条第二小路南側溝のほか、長岡京期の南北溝や掘立柱建物跡・奈良時代のしがらみ遺構・鎌倉時代以降の掘立柱建物跡・平安時代の土壇等<sup>(注1)</sup>を検出した。特に、三条大路等の長岡京条坊遺構は長岡京跡における条坊制痕跡検出の初例であり、以後の長岡京跡における発掘調査の基準になった。昭和57年度の調査では、長岡京期の掘立柱建物跡や井戸のほか、鎌倉時代以降の井戸・奈良時代のしがらみ遺構の一部<sup>(注2)</sup>を検出した。今回の調査は、トレーニングルーム建設に伴うもので、調査地は同校グラウンドの東北部に位置し、左京三条二坊五町と三条大路推定地に当る。

調査概要 調査は、13 m×22 m のトレンチを設定し、重機にて盛土等の除去を行い、その後人力による掘削作業に入り、遺構検出に努めた。その結果、トレンチ中央部で東西方向の長岡京期の溝を検出した。溝は幅約 1.6～2.3 m・深さ約 0.15 m を測り、埋土は2層に分かれ、上層から長岡京期の土師器・須恵器・軒平瓦・墨書土器・転用硯・円面硯・丸瓦・平瓦・木簡・木製品等が出土した。溝はトレンチ東端部付近で後世の削平のため消えているが、位置からみて三条大路の北側溝と考えられる<sup>(注3)</sup>。このほか、長岡京期の土器溜りや土壇・ピット・轍等<sup>(注3)</sup>を検出した。轍は南北方向に幾重にも走り、灰色砂礫で埋っている。この灰色砂礫層を削って、三条大路北側溝や土器溜り・ピット等が形成されており、側溝が造られる以前、長岡京造営に伴う整地の際の荷車の跡であろう。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

遺物は、三条大路北側溝や土器溜りを中心に木簡・墨書土器・円面硯・転用硯・軒丸瓦・軒平瓦・須恵器壺のミニチュア・種子類・木製品及び多数の須恵器・土師器・製塩土器・丸瓦・平瓦等が出土した。木簡(1)は、三条大路北側溝から出土したもので、両端は折れて現存長21.3cm・幅2.5cm・厚さ1.1cm~1.5cmを測る。中央部に「<sup>(鉦カ)</sup>□□□<sup>(遺カ)</sup>板壺村□」と記され、下方左端部には火鑽臼として使用した際の小孔が三か所残っている。小孔の一つは、墨痕を一部削って穿たれており、厚さ等からみて木簡として使用したものを火鑽臼に転用したと考えられる。墨書土器は14点出土しており、「廣」・「<sup>(戸カ)</sup>□田月人」(3)・「家□」(2)・「福」(4)・「女」・「十」等と記されている。軒平瓦は11点出土



第2図 木簡・墨書土器実測図

し、うち9点は平城京の6663C型式である。軒丸瓦は破片も含めて3点出土しており、うち1点は葉剣状を呈する単弁の軒丸瓦である。同種の瓦が奈良県の横井廃寺から出土している<sup>(注4)</sup>。また、刻印瓦が1点出土しており、平瓦の裏面に「理」と陽刻されている。硯類は、円面硯が2点・転用硯が20点以上出土している。このほか、鉄滓及び炉の壁体片らしきものが出土している。また、須恵器壺のなかに、体部中央に小孔を穿ったものがある。同じものが左京第98次調査で出土している。

まとめ 今回の調査では三条大路北側溝を確認し、轍や土器溜り等を検出し、木簡をはじめ多数の遺物が出土した。特に瓦が多く出土したことは、近辺に瓦を使用した建物の存在を予想させ、木簡や多数の墨書土器・硯類は、以前の調査成果とあわせて、左京三条二坊五町の宅地の性格を示すものであろう。また、鉄滓・炉壁は、鍛冶工場の存在を窺わせる。

(山口 博)

注1 高橋美久二「長岡京跡三条三坊第1次発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会)1975、高橋美久二他「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会)1976

注2 山下 正「長岡京跡左京第98次調査(7ANFNT-3地区)」(『京都府遺跡調査概報』第8冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1983

注3 三条大路北側溝(SD11901)の国土座標値 X=-118,594.3 Y=-26.117

注4 稲垣晋也『飛鳥・白鳳の古瓦』奈良国立博物館1973

## 22. 隼 上 り 2 号 墳

**所在地** 宇治市菟道東隼上り31  
**調査期間** 昭和59年6月18日～昭和60年3月30日  
**調査面積** 約 5,040 m<sup>2</sup>

**調査概要** 隼上り2号墳は、分布調査等で既にその存在が知られていた。周辺には、隼上り1号墳・3号墳が存在し、現存しないが数基以上からなる古墳群であった可能性が高い。

2号墳は、調査前から石材の一部が露出していた。墳丘は、耕作等により削平されていたが、石室の規模等から直径30m前後の円墳を想定できる。石室は玄室・羨道からなり、玄室長3.65m、玄室幅1.95m、羨道長5.50m、羨道幅1.60m、石室全長9.15mの規模を有する。奥壁は一石、玄室側壁は2石で構築されている。床面は拳大の河原石を敷いた礫床であり、遺物の大半は礫床直上から出土している。出土遺物には須恵器、横瓶・杯身・杯蓋・直口壺・台付長頸壺と蓋等があり、鉄刀・鏝・鉄鏃・鉄釘・馬具等の鉄製品や金環・中空銀環等がある。時期は、須恵器・蓋杯の型式から3～4時期に分ける事ができ、金環・銀環の個体数とも一致する事から追葬が2～3回行われた事を示している。石室の規模を3号墳と比較してみると、石室全長が3号墳のほぼ2倍になる。築造年代は6世紀後半である。

その他、調査地内からは、奈良時代の柱穴・中世の土塚墓等を検出している。特に、中世土塚墓の1基からは、中国・龍泉窯系の青磁碗2点、漆器1点、中世須恵器1点、鉄釘30点前後が出土しており、被葬者の性格を考える上で重要な資料である。墓の年代は13世紀中頃である。

隼上り瓦窯跡、大鳳寺跡等、周辺には数々の遺跡が存在するが、これらの遺跡との関連を考える事は、当地を理解する上で重要である。

(小池 寛)

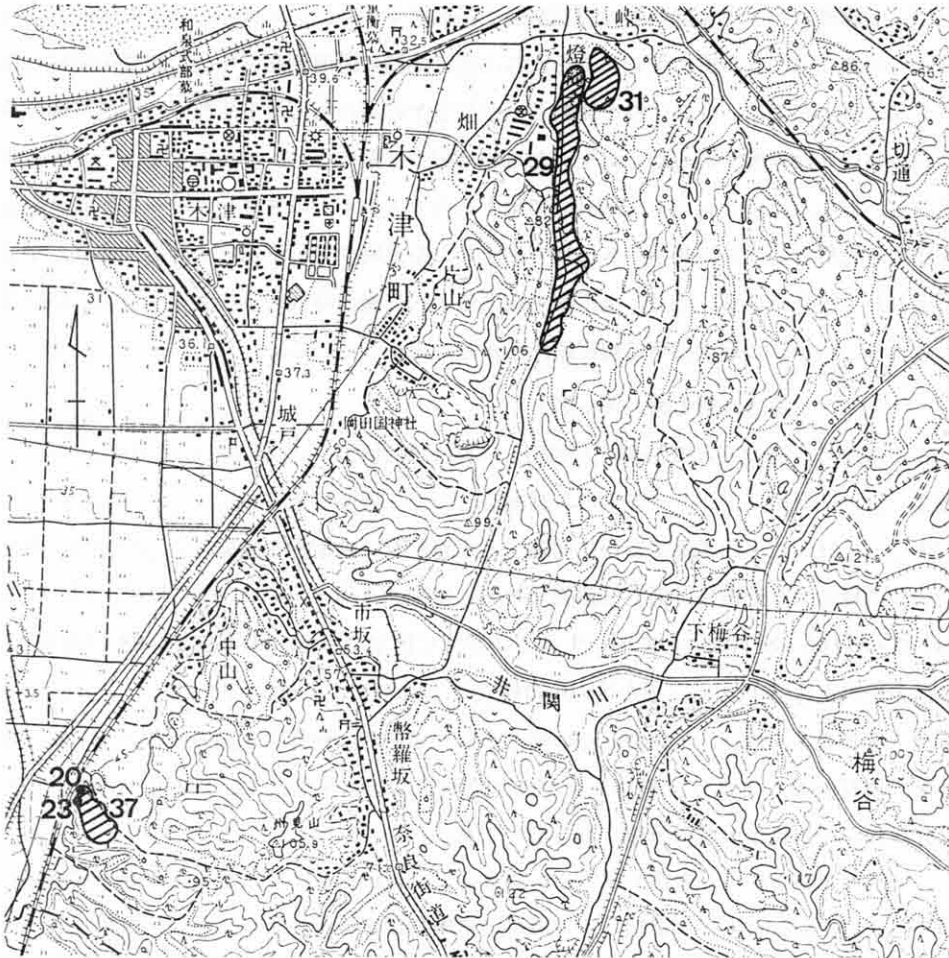


調査地位置図 (1/25,000)

## 23. 木津地区所在遺跡

所在地 相楽郡木津町大字木津小字赤ヶ平・同小字釜ヶ谷・大字市坂小字上人ヶ平  
調査期間 昭和59年12月1日～昭和60年3月30日  
調査面積 2,250 m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、住宅・都市整備公団の依頼による木津東部地区(木津町大字木津・市坂・梅谷・鹿背山)内に分布する遺跡の発掘調査である。初年度にあたる今年は、木津・市坂両地区で3か所の散布地の試掘調査と古墳2基の発掘調査を行った。



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

20. 市坂1号墳 23. 同4号墳 29. 釜ヶ谷遺跡 31. 赤ヶ平遺跡 37. 上人ヶ平遺跡

以下、各遺跡毎に調査の概要を報告する。

1. 赤ヶ平遺跡 (第1図, No. 31)

木津町でも有数の遺跡燈籠寺遺跡が立地する内田山丘陵(現在府立木津高校敷地)の東隣の丘陵が赤ヶ平遺跡である。今回の調査では、広大な(20,000 m<sup>2</sup>)この遺跡の北端部の5か所にトレンチを入れ、試掘を行った。いくつかの柱穴状ピットの他に顕著な遺構は検出できなかったが、多数のサヌカイト剥片と共に石鏃・スクレイパー・ハンマーストーンや弥生土器(中期)が出土した。丘陵稜部での弥生時代の集落が営まれていたことを示唆する資料が得られたと言えよう。

2. 釜ヶ谷遺跡 (第1図, No. 29)

燈籠寺遺跡と赤ヶ平遺跡の間の谷筋が釜ヶ谷遺跡である。南北1 km・東西500 m前後のこの遺跡では、5か所にトレンチを入れ、主に地層の断面観察を中心に試掘を実施した。明確な遺構としては、今この谷を流れる小さな釜ヶ谷川の旧河道と思料される流路跡を各地点で確認した程度であるが、出土した遺物は相当な量であり、多種多様である。最古の遺物は、谷の入口のトレンチ(5番地)で出土したサヌカイトのスクレイパーである。次に顕著な遺物群として谷の北半の各地点で出土した奈良時代の須恵器・土師器であり、中でも布目瓦は注目される。また、土馬数点がある。次に鎌倉時代前後の瓦器や羽釜が挙げられる。更に中世から近世に至る陶磁器片もかなり出土している。

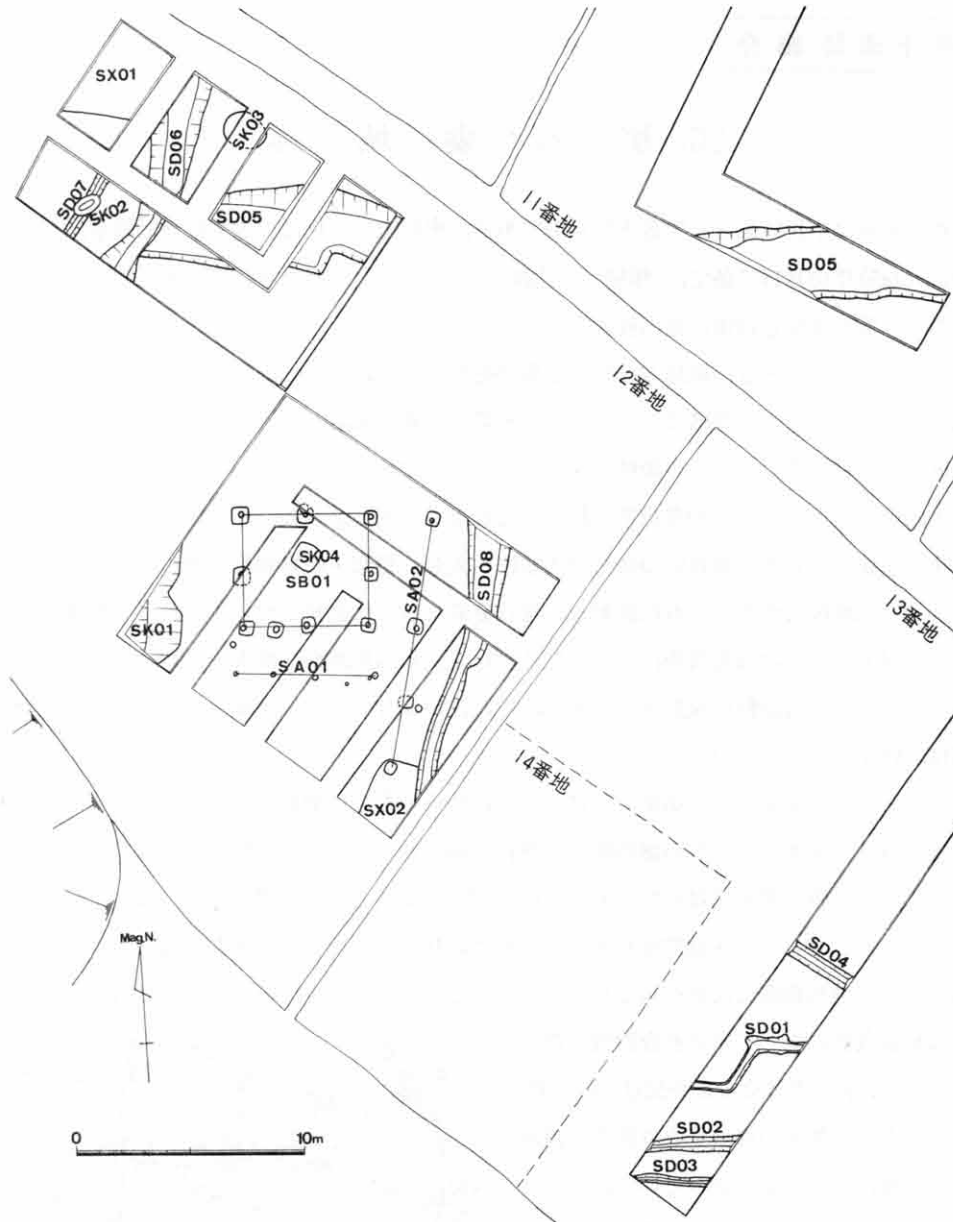
3. 上人ヶ平遺跡 (第1図, No. 37)

この遺跡は、ほぼ平坦な丘陵上にあり、現在は畑地になっている(17,000 m<sup>2</sup>)。今回の調査では、7か所にトレンチを入れ、試掘を行った。顕著な遺構を検出したのは、遺跡の西半部で、11・12・13番地で互いに関連すると思われる遺構群を確認した(第2図)。奈良時代の遺構が大半を占め、掘立柱建物 SB 01、柵列 SA 01・SA 02、溝 SD 01・SD 02・SD 03・SD 05・SD 08、土壇 SK 01 がこの時代に比定できる。SD 01・SD 08・SK 01からは多数の瓦片が出土し、またSB 01の柱穴の内4個に瓦片が入っていた。

出土遺物の多くは瓦片であり、その殆どが平瓦である。軒丸瓦4点の内3点が平城宮大膳職所用瓦6133Aであり、残り1点が東大寺所用の6235Aである。SD 01から出土した鬼瓦片は、平城宮Ⅳ式Bに分類されるものである。

上人ヶ平遺跡で検出した溝や建物は、真東西にその軸線をのせており、整然と区画されている様子が伺われ、出土遺物もこの遺跡の東南に接する市坂瓦窯跡の表採資料とも一致するところから、この瓦窯に関係した何らかの施設であったと推定されよう。

4. 市坂1号墳 (第1図, No. 20)



第2図 上人ヶ平遺跡11・12・13番地遺構平面図

この古墳は、現在国鉄関西本線によって半分以上が消滅しているが、調査の結果、墳丘を巡る幅3.3m・深さ20cmの周溝が検出され、かなりの埴輪片も出土したことから、古墳であったことが確認された。直径約16mと復原できる。

5. 市坂4号墳（第1図，No. 23）

盛土の最下層から近世の陶磁片が出土したので古墳でないことを確認した。

（小山雅人・戸原和人）



## 府下遺跡紹介

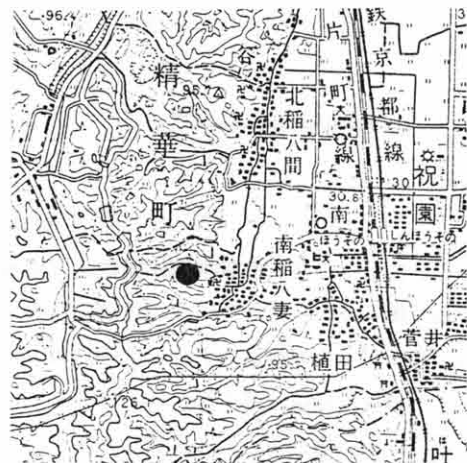
## 26. 稲八妻城跡

稲八妻城は中世城郭として著名なものである。史料上の初見は『大乘院寺社雑事記』文明17(1485)年10月14日条で、「稲屋ツマ之城」と出てくる。このときは応仁・文明の大乱の最中で、稲八妻城も西軍の畠山義就方の城としてみえる。

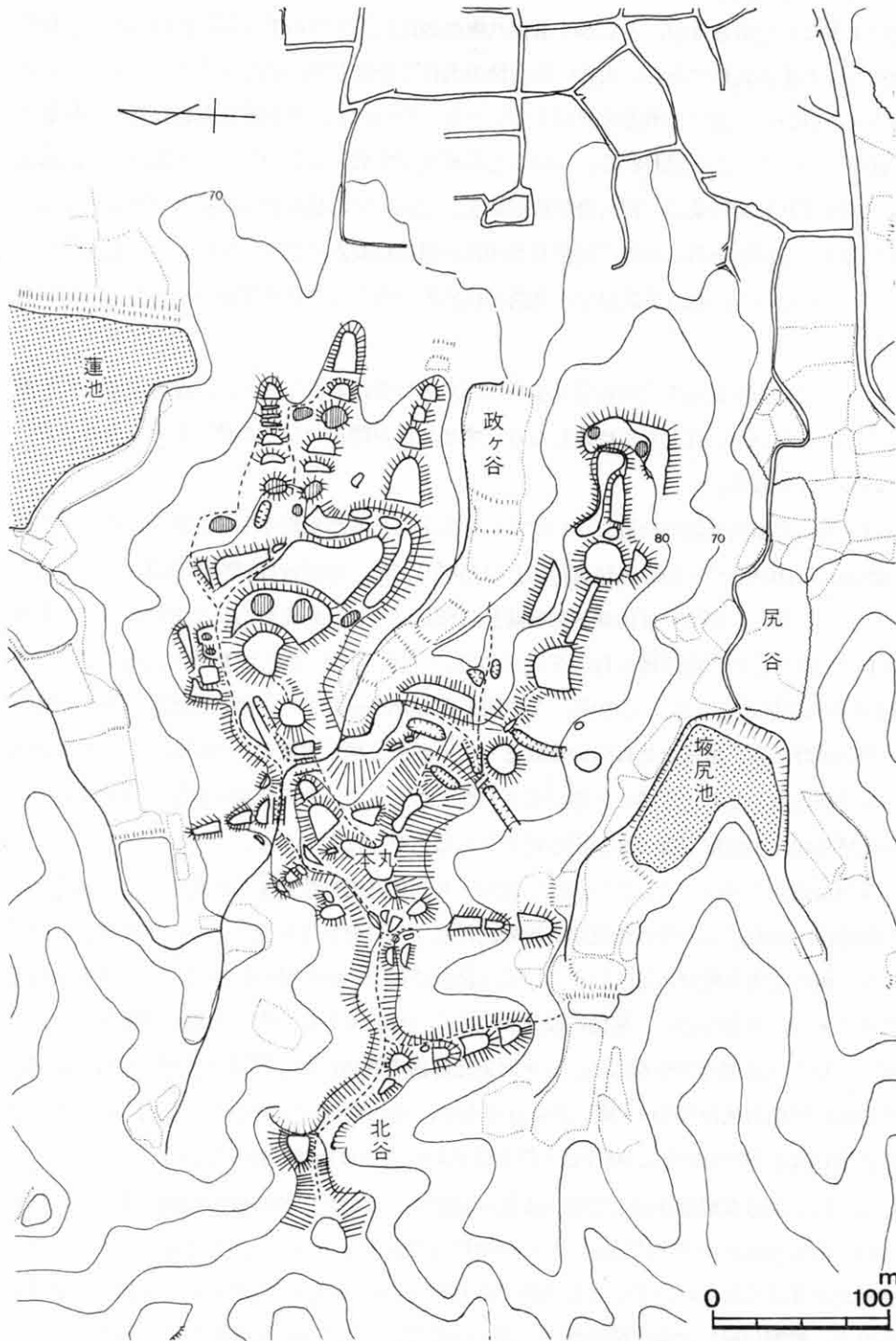
ところで、このとき山城地方の国人は集会を開き、土民も呼応して東西両軍の撤退を決議したのである。この決議に沿って両軍はその年の暮に撤退している。これがいわゆる山城国一揆のはじまりで、その後約7年間にわたって自治が行われている。稲八妻城は、この山城国一揆の中で中心的な役割を担うことになる。明応2(1493)年になると、大和国の古市澄胤が山城守護伊勢貞宗の命令で山城国へ入り、相楽・綴喜両郡を治めようとした。しかし、山城国人たちはそれに反対し、稲八妻城に籠って抵抗した。祝園地区で戦闘が行われ、双方に多くの戦死者を出したと伝えている。稲八妻城が山城国一揆の最後の拠城になったことは『蔭涼軒日録』からも明らかで、同年9月には稲八妻城も陥落し、山城国一揆は解体するに至っている。

こうして稲八妻城は一度陥落してはいるが、城そのものは廢城にならず、その後も存続している。山城地方は一揆の解体後、守護代一郡代制による支配が続けられたが、戦国時代に入り、合戦の舞台になっている。その中で稲八妻城も大和の筒井が入ったり、和田弾正が入ったりするが、『室町殿日記』によれば、16世紀中頃には奥田甚介なる者が稲八妻城にいて、足利幕府に反旗を翻したことがわかる。時の將軍足利義輝は永禄2(1559)年早々に松永久秀に対して奥田甚介討伐の命を下した。松永久秀はその命を受け、約2,000の兵をもって奥田の居城をとり囲み、最終的には奥田甚介を討ちとっている。このとき、松永は、忍者の浮嶋安左衛門を用いて搦手の深い堀を越え、築地をこえて中間の長屋に入って火を放ったため、しばらく炎上したと伝える。

稲八妻の地は松永久秀の働きによって平定されたので、戦功として足利幕府から狛・稲八妻の所領を与えられている。むろん、



第1図 稲八妻城跡位置図(1/50,000)



第2図 稲八妻城跡平面図（奥田裕之氏作成原図より再トレースした。）

この段階では足利幕府にはほとんど実力がなかったから、力で占領した地を幕府が追認したにすぎないであろうが、ともかくも稲八妻の地は松永久秀の手に帰したのである。松永は稲八妻を手に入れてから、大和信貴山城の大修築をはじめ、筒井・十市・小泉といった国人層と戦い、しだいに勢力を伸ばしていった。そのため、稲八妻城も修復され、松永方の城の一つになったと思われる。このことを直接示す史料はないが、『多聞院日記』永禄11(1568)年9月30日条に「稲八妻昨夜退城了」とあって、稲八妻氏が稲八妻城に住したことを示す。「退城」とあるのは、同年9月26日の織田信長入京によって松永が信長に臣従したためと考えられ、稲八妻氏は松永久秀の代官的存在として稲八妻城に居住したことが窺われる。

こうして織田信長の入京後に稲八妻氏が稲八妻城を追われてからは、記録がないため詳しくわからないが、ほどなく廃城になり、すでに江戸時代にはその位置がわからなくなっていたようである。

以上述べた稲八妻城の位置については、従来からいくつか説がある。江戸時代の『山城名勝志』(1705年)や『山城名跡巡行志』(1754年)では「植田村(精華町植田)」にありとしている。しかし、明治の『山城国郡村誌』(1881年)では、植田村内には城跡のようなものが1つもないとの理由で植田村説を否定して、「北稲八間村字城山(精華町北稲八間小字城山)を稲八妻城跡とした。その後、この地が有力であったが、近年、鈴木良一氏が山城国一揆の検討から、稲八妻には公的施設として守護所と稲八妻城の二つがあり、南稲八妻もその候補地として考えることを呈示された。こうして、稲八妻城の比定地は、①植田、②北稲八間、③南稲八妻の3か所が提出されるに至ったのである。

今回紹介するのは、この3つの比定地のうち南稲八妻に位置する城跡のことである。この城跡は、1980年に地元の歴史家奥田裕之氏によって発見されたもので、第2図にみえるように極めて大規模であるといえる。本丸跡は標高103mの地点にあり、この本丸に続く二ノ丸・三ノ丸を中心に、東側には約30の大小の郭とそれをつなぐ土橋や空堀があり、西側にも10余りの郭や空堀がある。全体に東に防備を固め、西に手薄な形態になっている。この城の規模は東西600m・南北360mもあり、南山城地方ではかつて最大といわれた鹿背山城(東西400m・南北300m)よりもはるかに大きな規模を持っている。

これほど大きな城跡が果して稲八妻城の跡にすぎないか、やや疑問の残るところである。この城跡の発見者の奥田氏は、稲八妻の地には守護所もあったことを考慮に入れて、稲八妻城跡か守護所跡か、いずれとも決めておられない。現時点では結論はさし控るべきであろうが、戦闘の続いた南山城の地で一揆の中心であったこと、長年月にわたり存在したことで、規模があまりに大きいこと等を考えるなら、断言はできないが稲八妻城跡である可能

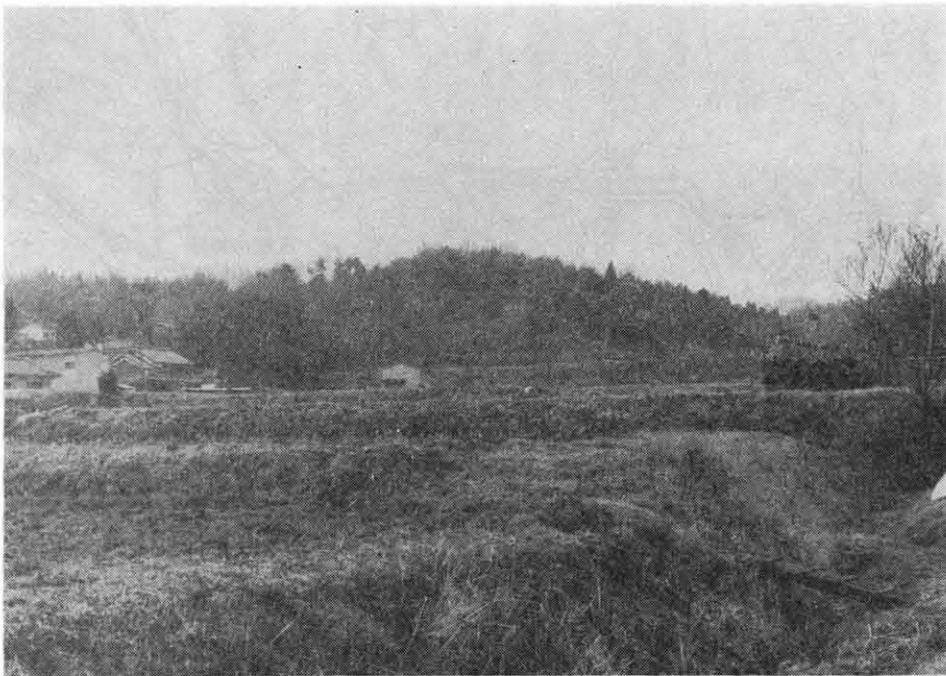
性の方が強いかもしれない。本紹介のタイトルも「稲八妻城跡」としたのもそのためである。ここで私が規模の大きさをあげたのは、建て替えの事実より推定したからにすぎない。現在、史料上確認した稲八妻城は、①山城国一揆時代、②和田弾正らの入部期、③奥田甚介の居城期、④松永支配下の時期 の大きく四時期に区分できるが、このうち少なくとも二回落城し、一度は炎上した事実さえある。こういったことを考えると、かなり建て替え・建て増しの事実を推定せざるをえず、規模の大きさも何時期かにわかれて造られたとすれば、あながち理解しやすいのではなからうか。

なお、本文を書くにあたって、奥田裕之氏には資料の提供を受けるなど大変お世話になった。記して謝意を表したい。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 奥田裕之「山城国稲八妻城と守護所について—京都府相楽郡精華町南稲八妻の山城跡の検討—」  
 (『桃山歴史・地理』18) 1981.4  
 中井 均「南山城地方の中世城郭跡」(『城』113) 1982.6



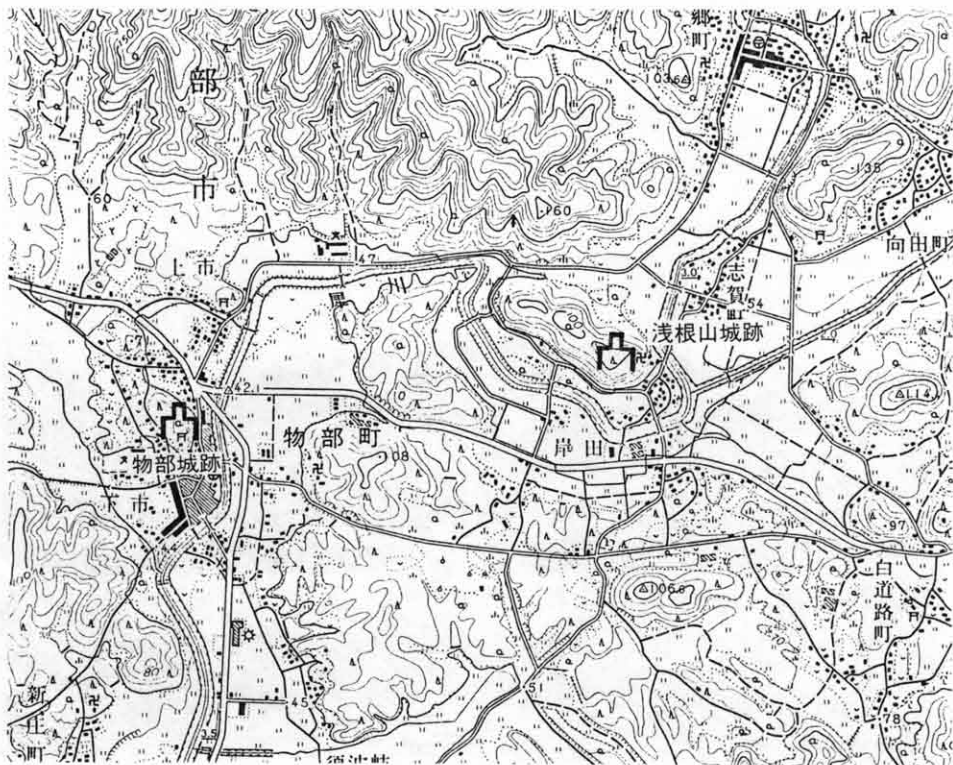
第3図 稲八妻城跡遠景

## 27. 浅根山城跡

浅根山城跡は、綾部市物部町岸田に所在する。昭和55年のはじめ頃、この城跡で簡易水道の上水場建設工事が行われていることがわかり、綾部市教育委員会によって現状確認が行われた後、測量調査が実施された。さいわい、城跡主要部については建設工事が行われていなかった。

浅根山城は、北西から南東方向に稜をもつ独立丘陵の南東端部に築かれた小規模な城郭である。丘陵の東・南・西側に沿って犀川が流れ、天然の水堀となっている。城跡北西側は、深さ約7mの大規模な堀切りによって丘陵稜を断ち切っている。主郭は、高さ約2m・基底部幅4m～5mの土塁で三方を囲まれる。土塁内は、約15m×20mのほぼ方形の平坦地である。井戸かとみられるくぼみもあるが断定できない。北西側土塁は、幅も広く、また、若干高くなっており、あるいは櫓台か。主郭の北東側は低い土塁状のものがみとめられる。地形からみて、主郭東側が虎口となっていたものであろう。

主郭の周囲には、狭い帯郭状のものや、小規模な郭状の緩斜面がみとめられるが、明瞭



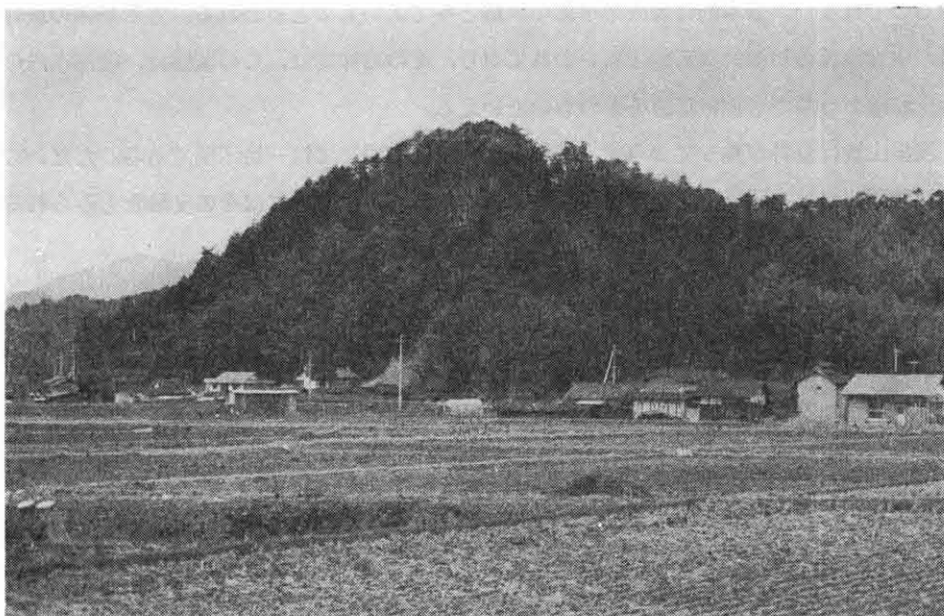
第1図 城跡位置図 (1/25,000)

なものではない。基本的には方形単郭の城跡とみてよいものと思われる。方形単郭の城郭は、中世城郭の初源的な形態ともいわれており、その意味では、この城跡は、綾部市内の中世城跡のうちでも古い形態をもつものといえる。

浅根山城は資料が残っておらず、築城年代や城主については一切不明である。ただ、この城跡西側には上原氏の居城であった物部城跡があり、位置的にはその支城ともみられる。



第2図 浅根山城跡測量図（『綾部市文化財調査報告』第7集所蔵のものを縮小）



第3図 浅根山城跡遠景(北東から)

上原氏は、信濃国(長野県)諏訪下社の神官の出で、諏訪郡上原村に居住したことから上原姓を名乗るようになったといわれる。鎌倉時代に地頭として何鹿郡(綾部市)に入部した。15世紀末頃には、上原賢家・元秀が丹波守護代として、室町幕府の管領であり丹波守護でもあった細川政元のもとで、勢力をふるっている。その後も、上原氏は、何鹿郡西部に勢力をもち、戦国時代末頃には織田信長から朱印状を受けたりしているが、賢家・元秀以後は、勢力を減少していく傾向にあった。延徳元(1489)年には、在地の土豪である荻野氏・大槻氏が上原氏と抗争する。上原氏は守護勢や但馬・摂津・備前の軍勢と合力して荻野氏・大槻氏の拠る位田城を約1年間にわたって攻めるが、城を落とせなかったばかりか、かえって大きな痛手を受けている。このように、上原氏が丹波守護代であった頃から在地勢力の抬頭のきざしがみえはじめる。そして、元亀2(1571)年には、上原右衛門大輔が、水上市(兵庫県水上市)黒井城の赤井直正に攻め滅される。

綾部市内に残る中世城館跡のうち、資料や伝承に上原氏の居城と伝えられるものは、上記の物部城跡のほかは、安場町の諏訪城跡だけである。また、綾部市西半部に限れば、大槻氏を城主と伝える城跡が圧倒的に多い。このことも、中世末期頃には上原氏の勢力がかなり減少していたことを物語るものであろう。

浅根山城跡は、方形単郭の城跡とみてよいものと思われ、古い形態を示すものである。仮に、浅根山城跡を、位置的な関係から物部城の支城とみなし、上原氏関係の城跡とする

と、その形態は、上原賢家・元秀の時期とほぼ合致するものとみられる。このようにみると、この城は上原氏の勢力の最盛期に築かれたものといえる。そして、その後の上原氏の勢力減少に伴い、拡張・改修がなされないまま廃城となり、それがために、古い形態を今に残すことになったのではないか。

浅根山城跡は、不明な点も多く、また小規模ではあるが、遺構の残存状況は良い。形態的にも古様を示す貴重な城跡である。また、物部城の支城とみなすことが可能であれば、綾部市内に残る数少ない上原氏の遺跡の一つに加えることもできる。今後、多方面から検討が加えられることを望みたい。

余談であるが、測量調査中に、工事用の重機の通路として掘削された箇所および排土から、古式土師器とみられる土器片を採集した。地形的にみて、浅根山城築城以前には、古墳時代前期頃の台状墓などがあった可能性がある。浅根山城跡は、複合遺跡としてとらえることもできる。

最後に、綾部市教育委員会技師中村孝行氏には、いろいろと御教示いただき、感謝いたします。

(引原 茂治)

#### 参考文献

- 藤井善布「綾部地方の中世城郭」(『城』第99号 関西城郭研究会) 1977
- 『綾部市史』上巻 綾部市史編さん委員会 1976
- 『綾部市文化財調査報告』第7集 綾部市教育委員会 1980
- 『日本城郭大系』第11巻 新人物往来社 1980



## 長岡京跡調査だより

長岡京跡における発掘調査の情報交換を目的として、毎月、当調査研究センターで行っている長岡京連絡協議会は、この1月～3月にかけて1月23日・2月27日・3月27日にそれぞれ開催された。この3か月に、長岡京跡で実施された発掘調査は、下表のとおり、長岡宮跡3件、長岡京跡右京城3件、同左京城3件の計9件である。また、大山崎町では、第7次遺跡確認調査が行われ、初めて山崎津と思われる遺構が検出された。調査件数は比較的少ないが、調査そのものは、北京極大路や二条大路の検出など重要な成果が上っている。

それでは以下に、この3か月間の長岡京連絡協議会で発表された調査について簡単に述べる。

## 宮内第152次 (1)

向日市教育委員会

調査地は、向日丘陵上に位置し、縄文時代晩期や弥生時代、古墳時代、長岡京期等の遺物が出土し、遺構としては、竪穴式住居跡・土壇・柵列・ピット等を検出した。竪穴式住居跡は、大半を後世の攪乱で削られ、規模等は確とは判明しない。土壇のうち2か所は縄文土器を含んでいた。

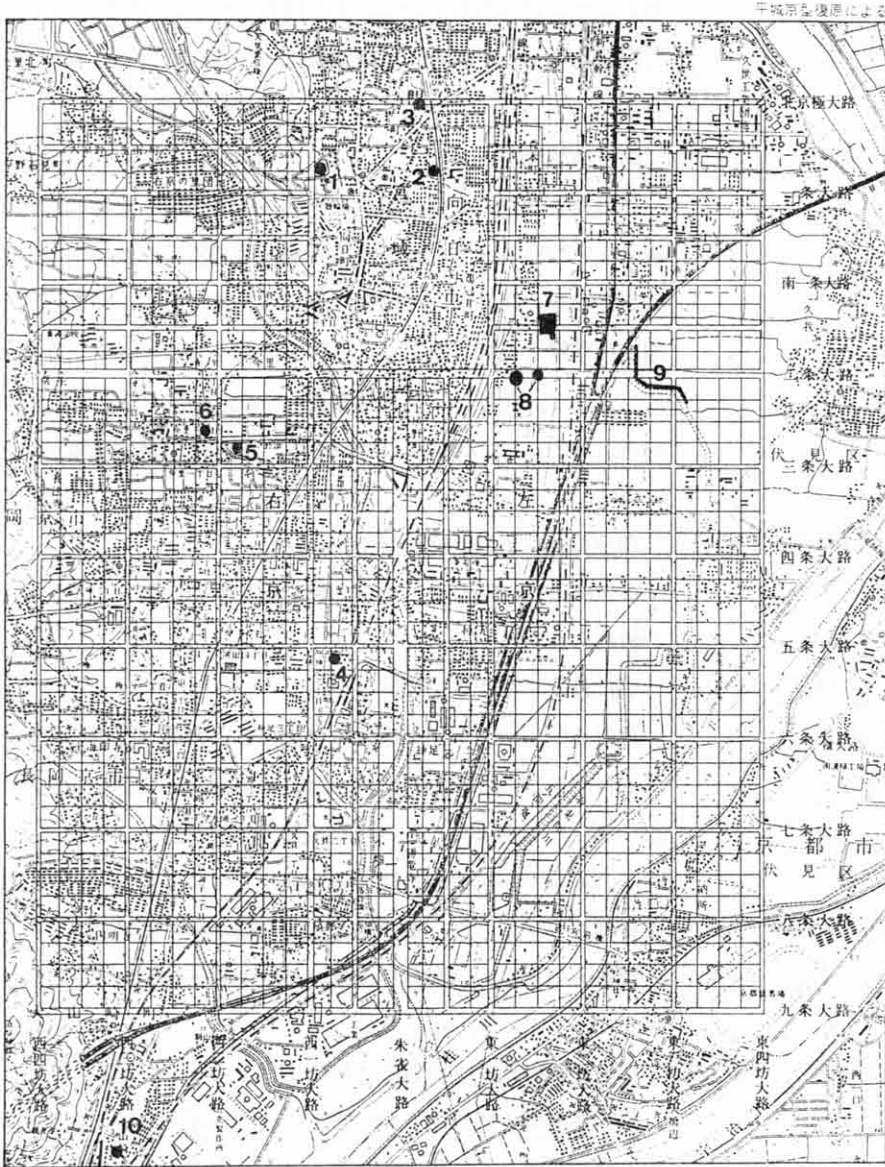
## 宮内第153次 (2)

向日市教育委員会

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第152次	7AN16D	向日市寺戸町中野2-1・2-3	向日市教委	60. 1.16～60. 2. 9
2	宮内第153次	7AN7I	向日市寺戸町岸ノ下16-7	〃	60. 2.15～60. 3.31
3	宮内第154次	7AN6E	向日市寺戸町小佃20-1, 2	〃	60. 2.23～60. 3. 6
4	右京第184次	7ANMDB	長岡京市神足2丁目1-3	(財)長岡京市埋	59.12. 6～60. 1.12
5	右京第185次	7ANIFD-3	長岡京市野添2丁目	〃	60. 2.18～60. 2.23
6	右京第186次	7ANIST-6	長岡京市今里3丁目11-1	〃	60. 3. 1～60. 3.31
7	左京第118次	7ANEJS-3 DKG-3	向日市森本町小柳・鶏冠井町十相	(財)京都府埋	59.10.18～60. 2.14
8	左京第120次	7ANFZN-2	向日市上植野町地田4-1	向日市教委	59.11.12～60. 3.13
9	左京第123次	7ANWSD WIR	京都市伏見区久我西出町	(財)京都市埋研	59. 1.17～
10	第7次遺跡確認調査		大山崎町大山崎字尻江	大山崎町教委	59. 1.30～60. 2.28

長岡京跡調査地一覧表 (S60.3.27現在)

# 長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

長岡宮の北辺官衙に当り、長岡京期の南北溝や掘立柱建物跡、土壇等を検出した。掘立柱建物跡は、2棟検出し、1つは東西2間・南北3間の南北棟である。もう1棟は、東西2間の建物で、トレンチの北へ延びている。軸線は真南北にはほぼ沿い、長岡宮の官衙建物の1つであろう。南北溝は、官衙を区画する溝かと思われる。

宮内第154次 (3)

向日市教育委員会

長岡京の北京極大路推定地に当り、その北京極大路の南北両側溝と推定される2本の長岡京期の東西溝を検出した。両溝の間は、砂が敷かれ、溝心々間で約9mを測る。北の溝が、北京極大路の推定中軸線とほぼ合致している。南の溝からは、瓦や土器が多量に出土した。溝幅は、北の溝が約1.2m、南の溝が約1.5~2mを測る。また、道路部分からは、轍と思われる溝状遺構も検出している。

右京第184次 (4)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

旧西国街道の近傍で、中世の掘立柱建物跡や溝・土壇・ピットを検出した。

右京第186次 (6)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

東西4間・南北7間の南北棟や東西3間南北3間の総柱の建物等8世紀末から9世紀初頭にかけての掘立柱建物跡を4棟検出した。またこれらより新しい時期の掘立柱建物跡を2棟検出している。このほか右京第54次調査等で検出している弥生時代の自然流路の延長を確認した。遺物は、長岡京期から平安時代にかけての土師器・須恵器のほか弥生土器・翼状剥片・打製石鏃・磨製石鏃等が出土している。

左京第118次 (7)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

南一条条間大路の南北両側溝や、長岡京期の掘立柱建物跡・柵列・井戸・溝・土壇等を検出した。南一条条間大路両側溝は、北側溝が幅約0.8~1.2m、南側溝が幅約2.2mを測り、溝心々間の距離は約22.5mを有する。掘立柱建物跡は、13棟以上検出した。建物跡は大半が東半部に集中し、北側溝沿いには、東西柱間約3mを測る1間×1間の建物が有り、門ではないかと思われる。

またこの建物から西へ、北側溝沿いに宅地を囲む柵列が並び、平行して東西溝がある。井戸は、2基検出し、1つは縦板組みの井戸枠が残り、素掘りの井戸からは、刀子やこて状鉄製品が出土した。調査地西端近くには、土師器の皿と「和銅開珎」や「神功開寶」等の錢貨が集中して出土する場所があり、何らかの祭りをした跡であろうか。出土品には、長岡京期の土師器・須恵器のほか「内膳」・「厨」・「楊」等と記された墨書土器や飛雲文の軒平瓦、「和銅開珎」・「神功開寶」・「萬年通寶」、刀子・こて状鉄製品、丸鞍、そして布留式の土師器や弥生土器、フレーク等がある。また特筆すべきものとして、南一条条間大路南側溝から、木製の「印」が出土した。ただ残念ながら印面は不詳である。

## 左京第120次 (8)

## 向日市教育委員会

長岡京の二条大路や東二坊第一小路・東二坊坊間小路等の推定地に当り、今回初めて二条大路の南北両側溝を検出することができた。北側溝が幅約1.1~1.7m、南側溝が幅約2.7~3mを有し、溝心々間距離は約8.7mを測り、二条大路としては極端に幅の狭い道路であることが判明した。このほか東二坊第一小路の東西両側溝や東二坊坊間小路西側溝・長岡京期の掘立柱建物跡・井戸・土壇・宅地内を区画する溝や柵列等を検出した。東二坊第一小路は、溝心々間で約8.5mを測る。また、中世の井戸や長岡京期以前の水田畦畔状遺構も併せて検出している。

遺物は、長岡京期の須恵器・土師器や、鴟尾・埴・軒平瓦・軒丸瓦・刀子・鉄斧・和銅開珎・神功開寶・萬年通寶・楯・人形・斎串・墨書土器・墨書人面土器・転用硯・凝灰岩、そして木簡等が出土している。このほか弥生土器・古墳時代の須恵器・瓦器・石鍋等が出土している。木簡には、「嶋史□□」等と記されたものがあり、墨書土器にも「嶋□」・「給服所」・「滔」・「厨」等と書かれたものが見られる。

## 左京第123次 (9)

## (財)京都市埋蔵文化財研究所

西羽東師川の河川改修工事に伴う調査で、三条第一小路南側溝や二条第二小路の南北両側溝、長岡京期の掘立柱建物跡等を検出している。このほか東三坊大路西側溝かと思われる南北溝や、弥

第7次遺跡  
確認調査 (10)

生時代の溝・土壇・小柱穴等を検出した。また、縄文晩期の土器も出土している。

大山崎町教育委員会

調査地は、旧西国街道に近在し、紀貫之の「土佐日記」にも登場する山崎津の推定地に当る。今回、初めてその山崎津の関連遺構を検出することができた。検出した遺構には、淀川の旧河道の一端や、その旧河道に連なると思われる舟入り状遺構等がある。舟入り状遺構は、東西約10.5～11 m、南北約3～3.7 m、深さ0.7～0.9 mを測り、東北部分がかき形に延びて旧河道に接続すると予想されている。時期は、出土遺物から9世紀末から10世紀代にかけて機能していたと思われる。出土遺物は、「富壽神寶」・「延喜通寶」等の銭貨や、輸入陶磁器類・緑釉陶器・黒色土器・土師器・須恵器等がある。また、瓦が多量に出土している。

(山口 博)



左京第118次調査南一条条間大路北側溝（西から）

## センターの動向 (60. 1～3)

1. できごと
1. 12 長岡京跡左京第118次調査(向日市体育館建設予定地)現地説明会開催, 参加者約70名
1. 19 隼上り古墳(宇治市)現地説明会開催, 参加者約80名
1. 23 長岡京跡連絡協議会開催
1. 29 赤ヶ平遺跡(相楽郡木津町)発掘調査終了59. 12. 1～
2. 1 上人ヶ平遺跡, 市坂古墳(相楽郡木津町)発掘調査開始～3. 29
2. 6 宮津城跡第4次(宮津市)発掘調査開始～3. 30
2. 14 長岡京跡左京第118次(向日市体育館建設予定地)発掘調査終了10. 18～
2. 27 長岡京跡連絡協議会開催
3. 1 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議一於大津市一出席(荒木事務局長, 白塚総務課長)
3. 2 土師川改修関係遺跡(福知山市)関係者説明会実施  
小金岐古墳群(亀岡市)現地説明会開催, 参加者約80名
3. 5 釜ヶ谷遺跡(相楽郡木津町)発掘調査終了59. 12. 1～
3. 7 青野遺跡(綾部市)発掘調査開始～3. 30
3. 8 土師川改修関係遺跡(福知山市)発掘調査終了59. 11. 8～
3. 13 志高遺跡(舞鶴市)関係者説明会実施
3. 14 波江古墳(福知山市)関係者説明会実施
3. 18 波江古墳(福知山市)発掘調査終了59. 10. 29～  
奥山田池遺跡(綴喜郡田辺町)関係者説明会実施
3. 19 市坂古墳, 上人ヶ平遺跡, 釜ヶ谷遺跡, 赤ヶ平遺跡(相楽郡木津町)関係者説明会実施
3. 22 味方遺跡(綾部市)関係者説明会実施
3. 23 宮津城跡(宮津市)関係者説明会実施
3. 27 志高遺跡(舞鶴市)発掘調査終了59. 10. 5～  
小金岐古墳群(亀岡市)発掘調査終了59. 12. 3～  
篠窯跡群(亀岡市)発掘調査終了59. 5. 17～  
長岡京跡連絡協議会開催
3. 28 第12回役員会理事会開催一於パレスサイドホテル一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 岸俊男, 川上貢, 中沢圭二, 藤田价浩, 武田浩, 東条寿各理事, 荒木昭太郎常務理事, 岡田忠司監事出席
3. 29 奥山田池遺跡(綴喜郡田辺町)発掘調査終了59. 12. 19～
3. 30 多保市城跡, 奥谷西遺跡(福知山市)発掘調査終了59. 5. 7～  
味方遺跡(綾部市)発掘調査終了59. 12. 13～

隼上り遺跡, 隼上り古墳(宇治市)発  
掘調査終了59. 6. 18～

## 2. 普及啓発事業

2. 23 第27回研修会—於向日市文化資料館  
研修室—開催(主題, 発表者及び題名)  
『長岡京跡調査の動向』長谷川達「長  
岡京跡左京第119次調査の成果」山中  
章「資料館の発想—向日市文化資料館  
の開館から—」宇都宮平「財団法人長  
岡京市埋蔵文化財センターの歩み」参  
加者124名
2. 23 第3回講演会—於向日市文化資料館

研修室—開催(講師及び演題)足利健亮  
「都城跡の歴史地理」参加者約130名

3. 10 宇治市成果報告会—於宇治市中央公  
民館—報告, 小池 寛「隼上り遺跡及  
び隼上り古墳の発掘調査成果」
3. 16 スライドによる乙訓の発掘—於向日  
市文化資料館—講演, 杉原和雄「昭和  
59年度の京都府下埋蔵文化財発掘調査  
概観」
3. 30 『京都府埋蔵文化財情報』第15号刊  
行

受贈図書一覧 (59. 12～60. 2)

(財)北海道埋蔵文化財調査センター	美沢川流域の遺跡群VII, 楠遺跡, 栄丘遺跡
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	熊野堂遺跡(1), 大釜遺跡・金山古墳群, 城平遺跡・諏訪遺跡, 賀茂遺跡, 十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡
(財)滋賀県文化財保護協会	井戸遺跡発掘調査報告書, 法養寺遺跡発掘調査報告書, ほ場整備関係発掘調査報告書X-5-1
(財)大阪文化財センター	佐堂(その1)
(財)東大阪市文化財協会	鬼虎川遺跡, 鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3-遺構編一
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所年報 1983, 橿原考古学研究所紀要 考古学論叢第10冊, 二上山北麓石器製作遺跡の調査
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書I
仙台市教育委員会	六反田遺跡II
袖ヶ浦町教育委員会	鼻欠遺跡
文化庁	全国遺跡地図 福岡県
長野市教育委員会	石川条里的遺構・上駒沢遺跡, 箱清水遺跡(2)
滋賀県教育委員会	国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II
彦根市教育委員会	城町円常寺遺跡, 品井戸遺跡, 稲部遺跡, 福満遺跡, 市立小中学校増改築工事に伴う発掘調査概要報告書
長浜市教育委員会	長浜市指定史跡長浜城跡発掘調査報告書, 官司遺跡・十里町遺跡調査報告書, 高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書
八日市市教育委員会	上日吉南遺跡・瓦屋寺カマエ遺跡発掘調査報告書, 内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書, 八日市市内遺跡分布調査報告書, 埋蔵文化財発掘調査報告書, 大森陣屋遺跡発掘調査報告書
栗東町教育委員会	手原遺跡発掘調査報告書
五個荘町教育委員会	木流遺跡発掘調査報告書I, 五個荘町埋蔵文化財発掘調査年報II
高島町教育委員会	音羽古墳群I, 大溝城I
美原町教育委員会	黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究, 美原の歴史 第4号
芦屋市教育委員会	新修芦屋市史 資料篇1, 芦屋の生活文化史-民俗と史跡をたずねて-
奈良市教育委員会	奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度, 奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度, 平城京東市跡推定地の調査II, 市道九条線関係



	遺跡発掘調査概報(Ⅱ)
新南陽市教育委員会	勝栄寺
香川県教育委員会	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 羽佐島遺跡(Ⅰ) 瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 大浦遺跡
佐賀県教育委員会	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第6集,同第7集 佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書2, 東多久バイパス 関係埋蔵文化財調査報告書, 川畦遺跡, 船石遺跡, 先部遺跡
宮崎市教育委員会	生目台住宅地計画区域内埋蔵文化財等調査報告書, 宮崎市遺跡等詳細 分布調査報告書, 第2回 宮崎の古代を考えるシンポジウム
(社)日本金属学会附属金属博物館	金属博物館紀要 第9号
栃木県立博物館	第10回企画展 中世下野の仏教美術
国立歴史民俗博物館	歴博 第8号
千葉市加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第11号, 縄文時代の石器—その石材の交流に関する 研究—
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館 10年の歩み
出光美術館	出光美術館 館報第49号
名古屋市見晴台考古資料館	年報Ⅲ
大阪市立博物館	第99回特別展—稲作2500年—米と日本文化
堺市博物館	館報Ⅲ, 住吉大社—歌枕の世界—
(財)辰馬考古資料館	1979年秋季展 東日本の縄文文化
鳥取県立博物館	郷土と博物館 第30巻 第1号(通巻59号)
北九州市立考古博物館	北九州市立考古博物館 常設展示図録
佐賀県立九州陶磁文化館	北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁
立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅲ, 安房・華房蓮華寺跡の調査
大谷女子大学資料館	観心寺要録(一)
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第18号
帝塚山考古学研究所	縄文から弥生へ, 弥生前期地域論
大網山田台遺跡調査会	大網山田台遺跡
東北新幹線遺跡調査会	八幡原遺跡の発掘—確認調査報告書—

(財)古代学協会	古代文化 第36卷 第12号, 同 第37卷 第1号~第2号
木簡学会	木簡研究 第六号
埋蔵文化財研究会	形象埴輪の出土状況
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 第14号~第15号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要
長岡京跡発掘調査研究所	活動の記録
宇治市教育委員会	宇治の遺跡, 文愛 第一号
木津町	木津町史 史料篇 1
元離宮二条城事務所	重要文化財二条城修理工事報告書 第六集
関 口 功 一	古代史研究 創刊号~第2号, 信濃 第36卷 第11号
安 藤 鴻 基	千葉県立上総博物館研究員紀要 第3集 (別刷)
相 川 之 英	第4回三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器
高 井 悌三郎	摂津旧清遺跡
岡 本 正太郎	古代文化を考える 第10号~第11号, 五條古代文化 第29号
足 利 健 亮	日本古代地理研究 一畿内とその周辺における土地計画の復原と考察一
神 崎 勝	季刊 河 第10卷 第1号 No. 30, 多可寺址出土の梵鐘鑄造遺構
村 岡 正	滋賀県の庭園(湖北地方)第2集

—編集後記—

いよいよ年度末になり、調査もようやく終るところが多くなりました。『情報』第15号をお届けします。

本号は、長岡京跡左京第118次調査が中心になりますが、ここからは、多くの掘立柱建物跡が検出できるなど、これまでの長岡京跡の調査ではみられなかったほどの広い面積を掘削しました。出土遺物も多くあり、豊富な資料を得ることができました。よろしく、御味読下さい。

(土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第15号

昭和60年3月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社  
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075)441-3155 (代)